

編 修 趣 意 書

(教育基本法との対照表)

受理番号	学校	教科	種目	学年
107-221	高等学校	国語科	古典探究	
※発行者の 番号・略称	※教科書の 記号・番号	※教科書名		

1. 編修の基本方針

1. 古典のすぐれた文章に触れることにより、言語感覚を磨き、知識と教養を身に付け、豊かな感性や情緒を育むことができるようにした。
2. 生徒が自主的・主体的に学習活動を行うことにより、思考力・判断力・表現力を養い、自発的・創造的な人間形成に進むことができるよう考慮した。
3. 対話的・協働的な学習活動を積み重ねることにより、さまざまな社会的要請に応え得る人間性の育成に役立てられるようにした。
4. 人間・生命・自然などに目を向けさせ、それらが我が国の伝統的な文化の中でどのように表現されてきたかを知ることができるように配慮した。
5. 歴史的・文化的背景を踏まえて我が国の伝統的な言語文化を捉え、生徒一人一人がその担い手であることを自覚させることを期した。

2. 対照表

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
古文編	<ul style="list-style-type: none"> ・古典としてすぐれた作品を採録し、作品の鑑賞を通して、豊かな情操と道徳心を養うことができるよう配慮した(第1号)。 ・主として随筆・評論教材を通して、真理を探究する人間のさまざまなありようを示すことにより、生徒の人間性・社会性の涵養に働きかけられる題材を採録した(第1号)。 ・「古典のしるべ」を適宜設定し、興味・関心に応じて知識と教養を広げられるようにするとともに、生徒を読書へ誘うようにした(第1号)。 ・「参考図録」を適宜設定し、古文の読解に必要な知識を身に付けるとともに、伝統と文化に親しめるように配慮した(第1号・第5号)。 	<p>p. 12～260</p> <p>p. 22～33 p. 136～137 p. 218～222 p. 224～229 p. 248～260</p> <p>p. 20 p. 44 p. 56 p. 74 p. 90 p. 105～106 p. 120 p. 130 p. 153 p. 168 p. 216 p. 223 p. 230 p. 260</p> <p>p. 70～73 p. 88～89 p. 118～119</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・「言語活動」を通して、主体性を発揮して課題に取り組めるようにした(第2号)。 	<p>p. 14～15 p. 34 p. 49 p. 69 p. 116～117 p. 134 p. 151～152 p. 154 p. 167 p. 174～175 p. 176～179 p. 222 p. 234 p. 246</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・古典における人間関係や社会理念に深く関わる題材を採録し、生徒が現代にも共通する問題として考えを深められるようにした(第3号)。 	<p>p. 12～19 p. 22～33 p. 36～43 p. 58～68 p. 75～87 p. 92～99 p. 102～104 p. 136～142 p. 144～150 p. 156～166 p. 170～215 p. 232～245</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・古代の戦乱を取り上げた題材を採録し、人間の感情の普遍性を読み取ることによって、生徒が倫理や道徳の問題を現実にも即して考察できるよう配慮した(第4号)。 ・生命や自然に深く関わる題材を採録し、生命・自然を尊重する態度を養うとともに、生徒が自らの問題として考えを深めることができるよう配慮した(第4号)。 	<p>p. 100～101 p. 108～115</p> <p>p. 16～17 p. 22～23 p. 26～27 p. 32～33 p. 46～47 p. 50～51 p. 122～129 p. 131～133 p. 164～166</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・主として評論教材を通して、生徒が先人にならって言語文化に対する考えを深められるようにした(第5号)。 	<p>p. 96～99 p. 218～221 p. 224～229 p. 248～260</p>

	<ul style="list-style-type: none"> 各単元の扉に作品・作者などに関する解説欄を設けるとともに、「言語活動」において我が国の伝統的な文化を解説することにより、興味・関心を喚起できるようにした（第5号）。 	<p>p. 11 p. 21 p. 35 p. 45 p. 49 p. 57 p. 91 p. 107 p. 121 p. 134 p. 135 p. 143 p. 154 p. 155 p. 167 p. 169 p. 217 p. 231 p. 234 p. 246 p. 247</p>
漢文編	<ul style="list-style-type: none"> 古典としてすぐれた作品を採録し、作品の鑑賞を通して、豊かな情操と道徳心を養うことができるよう配慮した（第1号）。 主として思想教材を通して、真理を探究する人間のさまざまなありようを示すことによって、生徒の人間性・社会性の涵養に働きかけられる題材を採録した（第1号）。 「古典のしるべ」を適宜設定し、興味・関心に応じて知識と教養を広げられるようにするとともに、生徒を読書へ誘うようにした（第1号）。 「参考図録」を適宜設定し、漢文の読解に必要な知識を身に付けるとともに、伝統と文化に親しめるように配慮した（第1号・第5号）。 	<p>p. 262～391 p. 332～339 p. 374～379 p. 278 p. 330 p. 380 p. 392 p. 302～303</p>
	<ul style="list-style-type: none"> 「言語活動」を通して、主体性を発揮して課題に取り組めるようにした（第2号）。 	<p>p. 266 p. 274～275 p. 286 p. 304 p. 312～313 p. 314～316 p. 327～329 p. 339 p. 340 p. 348 p. 358 p. 371～372</p>
	<ul style="list-style-type: none"> 古典における人間関係や社会理念に深く関わる題材を採録し、生徒が現代にも共通する問題として考えを深められるようにした（第3号）。 	<p>p. 280～285 p. 310～311 p. 318～326 p. 350～357</p>
	<ul style="list-style-type: none"> 古代の戦乱を取り上げた題材を採録し、人間の感情の普遍性を読み取ることによって、生徒が倫理や道徳の問題を現実在即して考察できるよう配慮した（第4号）。 生命や自然に深く関わる題材を採録し、生命・自然を尊重する態度を養うとともに、生徒が自らの問題として考えを深めることができるよう配慮した（第4号）。 	<p>p. 263 p. 268～273 p. 276～277 p. 288～301 p. 342～343 p. 382～391 p. 306～309 p. 346～347</p>
	<ul style="list-style-type: none"> 主として故事・寓話教材を通して、生徒が先人にならって言語文化に対する考えを深められるようにした（第5号）。 各単元の扉に作品・作者などに関する解説欄を設けるとともに、「言語活動」において我が国の言語文化に影響を与えた中国の伝統的な文化を解説することにより、興味・関心を喚起できるようにした（第5号）。 	<p>p. 262～265 p. 261 p. 267 p. 279 p. 286 p. 287 p. 305 p. 314～316 p. 317 p. 331 p. 340 p. 341 p. 349 p. 359 p. 371 p. 373 p. 381</p>
資料編等	<ul style="list-style-type: none"> 資料編に「文語文法要覧」「漢文基本句形一覧」等を用意し、古典の読解に必要な知識を身に付けることができるようにした（第1号）。 資料編に「古典文学史年表」「中国文化史年表」を、見返・巻末に「図録」「地図」等を設けて写真・図版を掲載し、古典の読解に必要な知識を身に付けるとともに、伝統と文化に親しめるように配慮した（第1号・第5号）。 	<p>p. 406～425 見返 p. 394～405 巻末①～②⑤</p>

3. 上記の記載事項以外に特に意を用いた点や特色

- 第二条第3号及び、学校教育法第51条1号「国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと」、また、第3号「社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと」を踏まえ、各教材の最後に「学習の手引き」「言葉の手引き」といった課題を用意し、発表や話し合いを含む多様な学習活動を設定した。教材の内容や構成などについて理解を深め、自らの考えを的確に表現する資質・能力を養うとともに、生徒相互の意見交流を通じて、多角的で客観性のある批判的思考能力を養えるよう配慮した。
- 書体にユニバーサルデザインフォントを取り入れたほか、カラーユニバーサルデザインにも配慮し、すべての生徒にとって学びやすい紙面となるよう配慮した。

編 修 趣 意 書

(学習指導要領との対照表、配当授業時数表)

受理番号	学校	教科	種目	学年
107-221	高等学校	国語科	古典探究	
※発行者の 番号・略称	※教科書の 記号・番号	※教科書名		

1. 編修上特に意を用いた点や特色

①単元構成・教材選定

- ・「言語文化」で育成された資質・能力をさらに推し進め、論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばすために、読むことの資質・能力を伸ばすための学びと、我が国の言語文化に対する理解を深めるための学びとが、それぞれ系統的に行えるように教材を配置した。
- ・教育現場の意見・要望を尊重し、学習指導の実態に即応できるよう、古文編と漢文編の合冊形態とした。それぞれの内は学習段階を考慮して二部構成とし、各部は文種(ジャンル)を基本にした単元構成とした。
- ・古文、漢文の教材の選定にあたっては、生徒の発達段階を考慮して、高校生として知っておくべき評価の定まった作品から、文種、長短、難易などに配慮しつつ厳選することを旨とした。
- ・日本漢詩を取り上げて、我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深められるようにした。
- ・古文の評論や漢文の思想を取り上げて、古典の学習においても文学的文章に偏ることなく、論理的思考力を伸ばすことのできる教材を用意した。
- ・各単元の扉に、該当単元の教材で何を学ぶかを「学習のねらい」として示し、教材の意図を学習者全体で共有しながら学びに取り組むことができるようにした。→「生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図る」ための配慮。

②[知識及び技能]への対応

- ・古文で「言葉の手引き」を設定したり、「重要古語」(古文)や「基本句形」(漢文)を抽出したりして、「A 読むこと」の内容と関連づけながら、古語の意味や、文語・訓読のきまりなどの知識を深めるとともに、文脈の中で語感を磨き、語彙を豊かにできるようにした。
- ・「古典のしるべ」に、採録した古典に関連する、解説・現代語訳などの書籍を紹介し、主体的な読書へ導くことができるようにした。
- ・巻末に「資料編」を、巻頭・巻末に「図録」「地図」等を用意し、豊富な資料や写真・図版を掲載して、知識をより深めるための一助とした。

③[思考力、判断力、表現力等]への対応

- ・「A 読むこと」に関しては、脚注の「問」、および「学習の手引き」の課題設定によって、作品の内容理解を深め、興味を広げることができるようにした。
 - * 「問」は、本文を解釈するうえでポイントとなる箇所、内容理解を確認する目的で示した。
 - * 「学習の手引き」は、文章全体の構成や展開の把握、「学習のねらい」に沿った内容の解釈を基本として、生徒のものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりできる設問を用意し、発表したり話し合ったり文章にまとめたりといった活動ができるようにした。
- ・「学習の手引き」とは別に、「A 読むこと」の言語活動が十分行われることを企図して、「言語活動」を随所に設定し、生徒の主体的・対話的で深い学びを促した(エ【朗読】については「和歌・俳諧」の「学習の手引き」で対応した)。

ア【内容、形式】 p.14~15 p.69 p.167 p.176~179 p.304

イ【読み比べ】 p.34 p.151~152 p.174~175 p.176~179 p.222 p.274~275 p.286
p.312~313 p.327~329 p.339 p.348 p.358 p.371~372

ウ【創作】 p.134 p.314~316

オ【調査、報告】 p.69 p.154 p.176~179 p.234 p.246 p.266 p.286

カ【言葉の変遷】 p.49 p.116~117

キ【名句・名言】 p.340

2. 対照表

図書の構成・内容			学習指導要領の内容				該当箇所	配当 時数
			知識及び技能		思考力・表現力・判断力等			
部	単元	教材	(1)	(2)	読むこと(1)	読むこと(2)		
古文編・ 第I部	説話(一)	古今著聞集	ア・エ	イ	ア・イ	ア	p.12-p.13	
		[言語活動]小式部内侍と和泉式部		エ	キ	ア	p.14-p.15	
		沙石集	ア	イ	ア・イ・ウ	ア	p.16-p.17	
		今物語	ア	イ	ア・イ・ウ	ア	p.18-p.19	
		[古典のしるべ]仏教と世俗の伝承、そして説話文学の世界	イ	ア			p.20	
	随筆(一)	徒然草	ア・エ	ア・イ	ア・イ・ウ・オ・カ・キ	ア・イ	p.22-p.29	
		方丈記	ア・イ・エ	ア・イ・エ	ア・イ・ウ・オ・カ・キ	ア・イ・オ	p.30-p.33	
		[言語活動]無常観の表現	イ・エ	ア	イ・エ・オ・カ・キ・ク	イ	p.34	
	物語(一)	伊勢物語	ア・イ・エ	イ	ア・イ	ア	p.36-p.41	
		大和物語	ア・イ	イ	ア・イ・ウ	ア	p.42-p.43	
		[古典のしるべ]平安時代前期の物語文学	イ	ア			p.44	
	随筆(二)	枕草子	ア・イ	ア・イ・エ	ア・イ・オ・キ	ア・イ	p.46-p.55	
		[言語活動]古語と現代語を比較する	ア	ウ	ク	カ	p.49	
		[古典のしるべ]三大随筆の文学史とその多彩な世界	イ	ア			p.56	
	物語(二)	源氏物語	ア	イ	ア・イ	ア	p.58-p.68	
		[言語活動]『源氏物語』と政治		エ	エ・キ	ア・オ	p.69	
		[古典のしるべ]天皇・后妃の呼称		ア			p.74	
		大鏡	ア・イ	イ	ア・イ・ウ	ア	p.75-p.87	
	日記(一)	[古典のしるべ]歴史物語の登場	イ	ア			p.90	
		紫式部日記	ア	イ	イ・ウ	ア	p.92-p.95	
		更級日記	ア	イ	ア・イ	ア	p.96-p.99	
		建礼門院右京大夫集	ア	イ	ア・イ	ア	p.100-p.101	
		十六夜日記	ア・エ	イ・エ	ア・イ・ウ・エ	ア・イ	p.102-p.104	
	物語(三)	[古典のしるべ]「日記文学」の時代	イ	ア			p.105	
		平家物語	ア・イ・エ	イ	ア・イ・カ	ア	p.108-p.115	
		[言語活動]読み比べる・平家物語	イ	ア・イ・ウ・エ	エ・オ・キ	カ	p.116-p.117	
	和歌・俳諧	[古典のしるべ]軍記物語の成立と展開	イ	ア			p.120	
		万葉集	イ・エ	ア・イ	ア・イ	ア・エ	p.122-p.124	
古今和歌集		イ・エ	ア・イ	ア・イ	ア	p.125-p.127		
新古今和歌集		イ・エ	ア・イ	ア・イ	ア	p.128-p.129		
[古典のしるべ]和歌の歌風・特色の移り変わり		イ・エ	ア			p.130		
春夏秋冬		イ・エ	ア・イ	ア・イ	ア・エ	p.131-p.133		
古文編・ 第II部	説話(二)	[言語活動]切れ字を使って俳句を作る	エ	ア・イ	オ	ウ	p.134	
		発心集	ア	イ	ア・イ・カ	ア	p.136-p.137	
		今昔物語集	ア	イ	ア・イ	ア	p.138-p.139	
	随筆(三)	宇治拾遺物語	ア	イ	ア・イ	ア・ウ	p.140-p.142	
		枕草子	ア	ア・イ	ア・イ	ア	p.144-p.150	
		[言語活動]読み比べる・十訓抄	ア	ア・エ	イ・ウ・エ・キ・ク	イ	p.151-p.152	
		[古典のしるべ]摂関政治と女房、文学		ア・エ			p.153	
	日記(二)	[言語活動]貴族の生活と年中行事		ア	オ・ク	オ	p.154	
		蜻蛉日記	ア・イ	イ	イ・カ	ア	p.156-p.159	
		和泉式部日記	ア	イ	イ・カ	ア	p.160-p.163	
		讃岐典侍日記	ア	イ	ア・イ	ア	p.164-p.166	
		[言語活動]平安時代の結婚		ア	イ・エ・オ・カ・キ	ア	p.167	
	物語(四)	[古典のしるべ]平安時代の婚姻関係と恋愛		ア・エ			p.168	
		源氏物語	ア・エ	ア・イ	ア・イ	ア・イ	p.170-p.211	
		[言語活動]読み比べる・江談抄	ア	エ	ウ・エ・キ	イ	p.174-p.175	
		[言語活動]読み比べる・夕顔(江國香織)	エ	エ	ウ・キ	ア・イ・オ	p.176-p.179	
		とりかへばや物語	ア・エ	イ	ア・イ	ア	p.212-p.215	
		[古典のしるべ]『源氏物語』以降の物語	イ	ア			p.216	
	評論(一)	無名草子	ア・ウ	イ	ア・イ	ア	p.218-p.221	
		[言語活動]読み比べる・紫式部日記	ア	エ	キ	イ	p.222	
		[古典のしるべ]清少納言と紫式部		ア			p.223	
		俊頼髓脳	ア・ウ・エ	イ	ア・イ	ア	p.224-p.225	
		無名抄	ア	イ	ア・イ・ウ	ア	p.226-p.227	
		毎月抄	ア・エ	イ	ア・イ	ア	p.228-p.229	
		[古典のしるべ]多様な評論	イ	ア			p.230	
	物語(五)	大鏡	ア・ウ	ア・イ	ア・イ・ウ	ア	p.234-p.245	
		[言語活動]菅原道真の祟りを調べる		エ	キ	オ	p.234	
		[言語活動]貴族の呼び名―官職と位階―		ア	エ・オ	オ	p.246	
評論(二)	風姿花伝	ア	イ	ア・イ・カ	ア	p.248-p.250		
	去来抄	ア・エ	イ	ア・イ	ア	p.251-p.253		
	三冊子	ア・エ	イ	ア・イ	ア	p.254-p.255		
	難波土産	ア	イ	イ・オ・カ	ア	p.256-p.257		
	源氏物語玉の小櫛	ア	イ	ア・イ	ア	p.258-p.259		
	[古典のしるべ]もののはれ論の位置	エ	ア			p.260		

音訓一覧表

漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁
蔵人	くろうど	11	平	たいらの	16	後見	うしろみ	28
成季	なりすえ	11	壬生	みぶの	16	兼行	かねゆき	28
隨身	ずいじん	11	公卿	くぎよう	16	言は	ものいは	28
沙石集	しゃせきしゆう	11	近衛府	このえふ	16	幾か	いくたびか	28
雑談集	ぞうたんしゆう	11	経	ふ	18	哀しみ	かなしみ	28
藤原	ふじわらの	11	候ふ	さうらふ	18	留まり	とどまり	28
信実	のぶざね	11	牛車	ぎつしゃ	18	大江	おおえの	28
小式部内侍	こしきぶのないし	12	領る	しる	19	阿弥陀	あみだ	29
和泉式部	いづみしきぶ	12	給び	たび	19	法華経	ほけきよう	29
保昌	やすまさ	12	寝殿造	しんでんづくり	19	去年	こぞ	30
妻	め	12	龍之介	りゆうのすけ	20	朝	あした	30
歌合	うたあはせ	12	隆国	たかくに	20	誰	た	30
定頼	さだより	12	景戒	きようかい	20	広周	ひろかね	30
局	つぼね	12	為憲	ためり	20	予	われ	32
御簾	みす	12	徒然草	つれづれぐさ	21	東南	たつみ	32
出でて	いでて	12	下部	うらべ	21	西北	いぬゐ	32
直衣	なほし	12	兼好	かねよし	21	朱雀	すざく	32
天橋立	あまのはしだて	12	建曆	けんりやく	21	富小路	とみのこうぢ	32
十訓抄	じつきんしyou	12	後鳥羽	ごとば	21	七珍万宝	しつちんまんぼう	32
道貞	みちさだ	12	寄人	よりゆうど	21	太政大臣	だいじょうだいじん	33
冷泉	れいぜい	12	長明	ながあきら	21	東洞院	ひがしのとういん	33
寛仁	かんにん	12	東	ひんがし	22	西洞院	にしのとういん	33
丹後守	たんごのかみ	12	住まる	とどまる	22	伊勢	いせ	35
公任	きんとう	12	少時	しばらく	22	在原	ありわらの	35
生野	いくの	12	狩野	かのう	22	業平	なりひら	35
入集	にっしゆう	14	何れの	いづれの	22	初冠	うひかうぶり	36
孫	むまご	15	処	ところ	22	平城	なら	36
侍り	はべり	15	不	ず	22	春日	かすが	36
誰	たれ	15	為に	ために	22	垣間見	かいまみ	36
失せて	うせて	15	観れ	みれ	23	狩衣	かりぎぬ	36
衣	きぬ	15	虚言	そらごと	24	忍草	しのぶぐさ	36
埋まれぬ	うづまれぬ	15	違ふ	たがふ	25	陸奥	むつ	36
通俊	みちとし	15	奇特	きどく	25	信夫	しのぶ	36
源	みなもの	15	煙	けぶり	26	融	とおる	37
俊頼	としより	15	一年	ひととせ	26	東	ひむがし	38
兼盛	かねもり	16	四十	よそぢ	26	童	わらは	38
忠見	ただみ	16	陽	ひ	26	築地	ついでち	38
御	み	16	淮南子	えなんじ	26	築き	つき	38
初恋	はじめのこひ	16	寿けれ	いのちながけれ	27	築地	ついでち	38
給はり	たまはり	16	則ち	すなはち	27	邸	やしき	38
帝	みかど	16	辱	はぢ	27	順子	のぶこ	38
多反	たへん	16	飛鳥川	あすかがは	28	高子	たかいこ	38
別	べち	16	御族	おんぞう	28	国経	くにつね	39

漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁
基経	もとつね	39	康秀	やすひで	51	列	つら	62
右馬頭	うまのかみ	40	主殿寮	とのもづかさ	52	兄弟	せうと	62
翁	おきな	40	御前	おまへ	52	内裏	うち	62
大殿籠ら	おほのごもら	40	俊賢	としかた	52	切に	せちに	62
御髪	みぐし	41	長保	ちようほう	52	飛香舎	ひぎようしゃ	62
睦月	むつき	41	左兵衛督	さひやうゑのかみ	53	輝く	かかやく	63
候ひ	さぶらひ	41	掌侍	ないしのじよう	53	惟光の朝臣	これみつのあそむ	64
貞観	じようがん	41	内侍司	ないしのつかさ	53	脇息	けふそく	64
姥捨	をばすて	42	尚侍	ないしのかみ	53	乳母子	めのとご	64
信濃	しなの	42	典侍	ないしのすけ	53	襲	かさね	64
更級	さらしな	42	右近衛	うこんえの	53	山吹	やまぶき	65
所狭がり	ところせがり	42	頭弁	とうのべん	54	犬君	いぬき	65
給び	たうび	42	職	しき	54	伏籠	ふせご	65
千曲	ちくま	42	紙屋紙	かうやがみ	54	薫きしめる	たきしめる	65
冠着山	かむりきやま	42	額	ぬか	54	髪ざし	かんざし	66
寝	い	43	蔵人頭	くろうどのとう	54	僧都	そうづ	66
来	き	44	陰陽	おんみよう	54	聖	ひじり	66
祖	おや	44	僧正	そうじよう	55	按察使	あぜち	66
落窪	おちくぼ	44	伏見	ふしみ	56	消息	せうそこ	67
貞文	さだぶん	44	外山	とやま	56	光吉	みつよし	67
枕草子	まくらのそうし	45	慮つて	おもんばかつて	56	団扇	うちわ	71
清原	きはらの	45	光源氏	ひかるげんじ	57	雲林院	うりんゐん	75
則光	のりみつ	45	藤裏葉	ふじのうらば	57	菩提講	ぼだいこう	75
愛敬	あいぎやう	46	雲隠	くもがくれ	57	対面	たいめ	75
唐土	もろこし	46	薫	かおる	57	黄泉路	よみち	75
梨花	りくわ	47	匂宮	におうみや	57	太政大臣	だいじやうのおとど	75
長恨歌	ちようごんか	47	夢浮橋	ゆめのうきはし	57	蔵人	くらうどの	75
網代	あじろ	48	宣孝	のぶたか	57	小舎人童	こどねりわらは	75
乳児	ちご	48	大宅世継	おおやけのよつぎ	57	承平	じようへい	75
司	つかさ	48	夏山繁樹	なつやまのしげき	57	絵詞	えことば	76
前駆	さき	48	御時	おほんとき	58	大犬丸	おほいぬまる	76
上達部	かんだちめ	48	一の皇子	いちのみこ	58	姓	さう	76
下衆	げす	48	男皇子	をのこみこ	59	猛く	たけく	78
県召	あがためし	48	上衆	じようず	59	今宵	こよひ	78
野分	のわき	50	軽き	かろき	59	豊楽院	ぶらくゐん	78
透垣	すいがい	50	皇女	みこ	60	仁寿殿	じじゆうでん	78
前栽	せんざい	50	淑景舎	しげいしゃ	60	塗籠	ぬりごめ	78
倒れ	たふれ	50	高麗人	こまうど	61	君達	きんだち	78
黄朽葉	きくちば	50	入内	じゆだい	61	益なし	やくなし	78
母屋	もや	50	御息所	みやすどころ	61	従者	ずさ	78
生絹	すずし	50	先帝	せんだい	61	宴	うたげ	78
宿直物	とのゐもの	50	母后	ははきさき	61	証なき	そうなき	79
文屋	ふんやの	51	后	ためし	62	申して	まして	79
			例			中関白殿	なかのくわんぱくどの	

漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁
霧り	ままははきり	96	大音声	だにおんじやう	114	天平勝宝	てんぴやうしようほう	123
継母	ままはは	96	柄風	びやうぶ	113	江津	ごうつ	123
惟規	のぶのり	95	屏風	びやうぶ	113	大伴家持	おほとものやかもち	123
書	ふみ	95	判官	はうぐわん	113	依り	より	123
才	ざえ	94	下関	しものせき	112	清に	さやに	123
日本紀	にほんぎ	94	大長刀	おほなぎなた	112	小竹	ささ	123
具平	ともひら	92	直垂	ひたたれ	112	我	あ	123
敦成	あつひら	92	能登守教経	のとかみのりつね	112	念ひ	おもひ	123
中務の宮	なかつかさのみや	92	能登	のと	112	放り	さかり	123
尿	しと	92	重衡	しげひら	111	八十隈	やそくま	123
御座	おまし	92	知盛	とももり	111	荒磯	ありそ	123
冷泉為相	れいぜいためすけ	91	教盛	のりもり	111	和多豆	にきたづ	123
伊行女	これゆきのむすめ	91	重盛	しげもり	111	海辺	うみへ	123
資盛	すけもり	91	近江大津宮	おうみのおおつのみや	110	鯨魚	いさな	123
夜の寢覚	よるのねざめ	91	暮の	ゆふべの	110	石見	いはみ	123
道真	みちざね	91	甲	かぶと	110	柿本朝臣麻呂	かきのもとのおそみひとまろ	123
上総	かずさ	91	候ふ	ざうらふ	109	聖武	しようむ	122
菅原孝標女	すがわらのたかすえのむすめ	91	疎略	そらく	109	大伴旅人	おおともたびと	122
増鏡	ますかがみ	90	体	てい	109	筑前守	ちくぜんのかみ	122
赤染衛門	あかぞめえもん	90	三位	さんみ	108	東近江	ひがしおうみ	122
栄花	えいが	90	薩摩守	さつまのかみ	108	木末	こぬれ	122
六国史	りつこくし	90	忠度	ただのり	108	際	ま	122
大宰権帥	ださいのごんのそち	86	理	ことわり	108	象山	きさやま	122
伊周	これちか	86	祇園精舎	ぎをんじやうじや	108	山部宿禰赤人	やまべのすくねあかひと	122
故	け	86	信濃前司行長	しなののぜんじゆきなが	107	罷る	まかる	122
中心	なから	86	詞書	ことばがき	106	山上憶良臣	やまのうへのおくらのおみ	122
饗応	きやうよう	86	建礼門院右京大夫	けんれいもんいんのうきやうのだいぶ	106	妹	いも	122
帥殿	そちどの	86	成尋阿闍梨母	じょうじんあじやりのは	106	紫草	むらさき	122
町	まちの	85	後深草院	ごふかくさいんの	106	大海人皇子	おおあまのみこ	122
一尺	ひとさく	84	十六夜	いざよい	106	標野	しめの	122
辺	わたり	84	讚岐典侍	さぬきのすけ	105	額田王	ぬかたのおほきみ	122
武者	むさ	84	道綱母	みちつなのはは	105	遊獵	みかり	122
案内	あない	84	土佐守	とさのかみ	105	蒲生野	かまふの	122
安倍	あべの	83	衝立	ついたて	103	与謝蕪村	よさぶそん	121
懐仁	やすひと	83	黄楊	つげ	103	曾我	そが	120
破り	やり	83	興津	おきつ	103	将門	まさかど	120
天叢雲劍	あめのむらくものつるぎ	82	東下り	あずまくだり	102	甲斐	かい	119
勾玉	まがたま	82	遠江	ととうみ	102	死途	しで	115
元慶寺	がんぎようじ	82	手越	てごし	102	馬手	めて	114
山科	やましな	82	深山	みやま	101	弓手	ゆんで	114
春宮	とうぐう	82	太秦	うづまさ	98	弟	おとと	114
神璽	しんし	82	下総	しもつさ	97	剛	かう	114
丙戌	ひのえいぬ	82	上総介	かずさのすけ	96	安芸	あき	114
高御座	たかみくら	80	常陸	ひたち	96	安芸郷	あきのがう	114

漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁
信濃道	しなのぢ	124	字	あざな	141	雅致	まさむね	160
墾道	はりみち	124	来	こ	141	為尊	ためたか	160
刈株	かりばね	124	芳年	よしとし	141	濟時	なりとき	160
防人歌	さきもりうた	124	撰津前司	せつつのぜんじ	142	枝	え	161
幸く	さく	124	大殿油	おほとなぶら	144	便なげ	びなげ	162
丈部稻麻呂	はせつかべのいなまる	124	顕証	おほとなぶら	144	明後日	あさて	165
旋頭歌	せどうか	124	葛城	けそう	144	大弐三位	だいにのさんみ	165
貫之	つらゆき	125	役行者	かづらき	144	懺悔	ざんげ	165
天地	あめつち	125	火焼屋	えんのぎようじや	145	家範	いえのり	165
武士	もののふ	125	衛士	ひたきや	145	後朝	きぬぎぬ	167
凡河内躬恒	おほしかふちのみつね	126	眠たき	えじ	146	餅	もちい	167
遍照	へんぜう	126	寝	ねぶたき	146	露顕	ところあらわし	167
是貞	これさだ	126	長女	ぬ	146	有職故実	ゆうそくこじつ	169
深養父	ふかやぶ	126	長押	をさめ	146	虜	とりこ	170
延喜	えんぎ	127	響	なげし	146	魔除け	まよけ	170
式子内親王	しよくしなしいしんわう	128	都良香	ひびき	146	もの怖ぢ	ものおぢ	171
隠岐	おき	128	御殿	みやこのよし	147	弓弦	ゆづる	172
曾禰好忠	そねのよしただ	128	尽く	おとど	147	宿直奏し	とのみまうし	172
俊成女	としなりのむすめ	129	猶ほ	ことごとく	147	物の怪	もののけ	173
義清	のりきよ	129	九品蓮台	なほ	148	対へて	もののけ	174
雅経	まさつね	129	下品	くほんれんだい	148	欲ふ	こたへて	174
夫	つま	130	唯だ	げぼん	148	退り	おもふ	174
難波	なには	130	以つて	ただ	148	件	まかり	174
井原西鶴	みはらさいかく	131	為す	もつて	148	扶け	くだん	174
置土産	おきみやげ	131	応に：し	なす	148	能はず	たすけ	174
向井去来	むかみきよらい	132	慶滋保胤	まさになべし	148	了んぬ	あたはず	174
服部嵐雪	はつとりらんせつ	132	炭櫃	よししげのやすたね	148	河原院	をはんぬ	175
女子	をなご	132	炭櫃	すびつ	150	灯し	かわらのいん	176
灯籠	とうろ	132	看る	みる	150	妃	ともし	176
青海苔	あをのり	133	篤い	あつい	152	網代	きさき	180
仰のけ	あふのけ	133	路子	みちこ	153	汗衫	あむじろ	180
読本	よみほん	133	御精進	みさうじ	154	口強く	かざみ	180
枝折	しおり	133	干支	えと	154	副車	くちごはく	181
温み	ぬくみ	134	六月祓え	みなづきばらえ	154	筒	ひとだまひ	181
験	しるし	137	荷前	のさき	154	後目	どう	181
寿	いのち	137	倫寧女	ともやすのむすめ	155	執念き	しりめ	182
越前守	ゑちぜんのかみ	138	雅致女	まさむねのむすめ	155	験者	しふねき	184
語	こと	138	顕綱	あきつな	155	退き	げんざ	184
受領	ずりよう	138	十月	ながつき	156	積迦	しぞき	184
微妙	みめう	139	二、三日	かみなづき	156	帷子	しゃか	185
指貫	さしぬき	140	文箱	ふつかみか	156	魂	かたびら	185
退き	のき	140	五、六日	いっつかむいか	158	四方	たま	188
股立ち	ももだち	140	悪し	あし	158	神戸	よも	188
希有	けう	141	築土	ついでひじ	160	続古今集	しよくこきんしゆ	188

漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁
四、五人	よたりにいつたり	189	師輔	もろすけ	232	遂に	つひに	262
明石	あかし	189	東風	こち	233	呉越同舟	ごゑつどうしう	263
数珠	ずず	190	防府	ほうふ	233	如し	ごとし	263
民部大輔	みんぶのたいふ	190	駅	むまや	234	者	は	263
手鑑	てかがみ	190	是れ	これ	234	敢へて	あへて	263
前右近将監	さきのうこんのぞう	191	勸請	かんじょう	234	可き	べき	263
二十里外故人心	じせんにりのほかこじんこのころ	191	辱号	ぞくがう	238	夫れ	それ	263
常陸介	ひたちのすけ	191	佐理	すけまさ	240	与は	とは	263
賢木	さかき	191	敦敏	あつとし	240	悪む	にくむ	263
毎に	ごとに	191	斉敏	ただとし	240	濟る	わたる	263
秋好	あきこのむ	193	今治	いまばり	240	遇は	あは	263
花散里	はなちるさと	193	昼	ひ	241	逆鱗	げきりん	264
屈しつる	くしつる	194	大山積	おおやまづみの	241	為る	為る	264
住吉	すみよし	194	公信	きんのぶの	244	然れども	しかれども	264
侮らはしかる	あなづらはしかる	195	近衛少将	このえのしょうしょう	246	若し	もし	264
本意	ほい	195	宰相中将	さいしやうのちやうじやう	246	能く	よく	264
頰杖	つらづゑ	198	太政大臣	おおきおとど	246	幾し	ちかし	264
階	きざはし	201	足利義満	あしかがよしみつ	247	方たり	あたり	265
階	はし	201	賀茂真淵	かものまぶち	247	若し	ごとし	265
蘇芳	すおう	201	童形	どうぎやう	248	湯湯	しやうしやう	265
衛門督	ゑもんのかみ	202	児	ちご	249	復た	また	265
御法	みのり	206	申樂	さるがく	249	以為へらく	おもへらく	265
勝朗	かつお	206	立合	たちあひ	249	為に	ために	265
大君	おおいぎみ	208	側みたる	そばみたる	249	好	よしみ	266
黄鐘調	わうしきでう	208	栗原信充	くりはらのぶみつ	251	孟参	もうしん	267
傾きかかりて	かたぶきかかりて	210	出来	しゆつたい	253	鼓腹撃壤	こふくげきじやう	268
双六	すぐろく	212	己	おの	255	茆茨	ぼうし	268
埋もれ	むもれ	212	虚実皮膜論	きよじつひにくのろん	256	戴く	いたたく	268
帳	とぼり	212	虚	うそ	256	康衢	かうく	268
花薄	はなすすき	213	皮膜	ひにく	256	識ら	しら	269
狭衣	さごろも	216	情	こころ	258	順ふ	したがふ	269
光起	みつおき	221	空蟬	うつせみ	258	則	のり	269
堕ち	おち	223	泥水	ひぢみづ	259	作し	なし	269
従り	より	224	為章	ためあきら	260	息ふ	いこふ	269
冥き	くらき	224	韓非子	かんびし	261	幾ど	ほとんど	270
伊丹	いたみ	225	春秋	しゆんじゆう	261	自り	より	270
昆陽	こや	225	呂氏春秋	りよししゆんじゆう	261	視	み	270
通光	みちてる	229	賈島	かたう	262	寧し	やすし	270
三冊子	さんぞうし	230	騎り	のり	262	事へ	つかへ	270
三木貞成	みきさだしげ	230	作さんと	なさんと	262	誉め	ほめ	271
穂積以貫	ほづみいかん	230	未だ：ず	いまだ：ず	262	鷄鳴狗盜	けいめいくたう	272
本居宣長	もとおりのりなが	230	衝たる	あたる	262	先づ	まづ	272
石上私淑言	いそのかみささめごと	230	具に	つぶさに	262	納れ	いれ	272
宣旨	せんじ	232	佳し	よし	262	見えん	まみえん	272

漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁
止め	とどめ	272	勝へ	たへ	282	何如	いかん	292
囚へて	とらへて	272	囚りて	よりて	282	即ち	すなはち	292
抵り	いたり	272	止だ	ただ	282	内れ	いれ	292
幸姫	かうき	272	向に	さきに	283	側て	そばだて	292
蓋し	けだし	273	是くの	かくの	283	披き	ひらき	292
積さるる	ゆるさるる	273	夫	かな	283	何為る	なんする	292
即ち	すなはち	273	歐陽脩	おうやうしう	284	賜へ	たまへ	292
方に	まさに	273	陳康肅	ちんかうしゆく	284	覆せ	ふせ	292
食頃	しよくけい	273	積き	おき	284	還り	かへり	293
怨み	うらみ	273	担	に	284	故らに	ことさらに	293
伐ち	うち	273	中つる	あつる	284	窃かに	ひそかに	293
故	ゆゑ	274	但だ	ただ	284	須臾	しゆゆ	293
卒に	つひに	274	微しく	すこしく	284	如き	ゆき	293
特だ	ただ	274	徐ろに	おもむろに	284	奈何	いかん	294
耳	のみ	274	湿は	うるほは	285	如今	いま	294
宜しく	よろしく	274	遣る	やる	285	操れる	とれる	294
尚ほ	なほ	274	所謂	いはゆる	285	度り	はかり	295
所以	ゆゑん	274	魏晋南北朝	ぎしんなんぼくちよう	286	間び	しのび	295
張耳	ちやうじ	276	唐宋八家文	とうそうはつかぶん	286	安くにか	いづくにか	295
以みて	ひきみて	276	明	みん	286	罷れ	つかれ	297
走ぐる	にぐる	276	清	しん	286	如かず	しかず	297
空しく	むなしく	276	沈徳潜	しんとくせん	286	駿馬	しゆんめ	298
逐はん	おはん	276	本紀	ほんぎ	287	為り	つくり	298
若	なんぢ	276	行	ゆくゆく	288	蓋ふ	おほふ	299
疾く	とく	276	従弟	いとこ	288	泣	なみだ	299
良	やや	276	虞	ぐ	288	行	かう	299
棄て	すて	276	曹無傷	さうむしやう	289	困しむ	くるしむ	299
上等	ほとり	277	新豊	しんぽう	289	亡ぼす	ほろぼす	299
等	ら	277	美姫	びき	289	非ざる	あらざる	299
倍き	そむき	277	令む	しむ	289	固より	もとより	299
六朝	りくちよう	279	意は	おもは	290	縦ひ	たとひ	300
食ふ	やしなふ	280	今者	いま	290	呂馬童	りよばどう	301
見はれ	あらはれ	280	環	わ	290	指し	しめし	301
安くんぞ	いづくんぞ	280	留め	とどめ	291	王翳	わうえい	301
策うつ	むちうつ	280	与に	ともに	291	購ふ	あがなふ	301
材	さい	280	垂父	あほ	291	頭	かうべ	301
嗚呼	ああ	281	者	こと	291	閑かなり	しづかなり	306
邪	か	281	起ち	たち	291	両に	ともに	306
柳宗元	りうそうげん	282	為り	なり	291	夢得	ぼうとく	306
蔽れ	かくれ	282	前み	すすみ	291	憶ふ	おもふ	307
且に：す	まさに：す	282	不者ずんば	しからずんば	291	王維	わうゐ	307
益	ますます	282	鴻門会	こうもんのかい	291	為る	なる	307
習れ	なれ	282	是	ここ	292	毎	ごと	307
終に	つひに	282			292	ますます	ますます	307

漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁
処	とき	307	縁りて	よりて	319	扱	えらび	332
遍く	あまねく	307	語げ	つげ	319	参	しん	332
少く	かく	307	宛	ゑん	320	古	いにしへ	334
到らん	いたらん	307	太だ	はなはだ	320	汎く	ひろく	334
円なる	まどかなる	307	通ひ	たがひ	320	反ら	かえら	335
幽かなり	しづかなり	308	将た	はた	320	恵王	けいわう	336
自づから	おのづから	308	略	ほぼ	320	交	こもごも	336
画き	ゑがき	309	畏忌	みき	320	征り	とり	336
碁局	ききよく	309	作す	なす	321	遣つる	すつる	337
須つ	まつ	309	著け	つけ	321	猶ほ…き	なほ…ごとき	337
好し	よし	310	径ちに	ただちに	321	諸を	これを	337
菅家後集	かんげこうしふ	310	往く	ゆく	322	信に	まことに	337
晋帥	ときのり	310	漸く	やうやく	322	下き	ひくき	338
去けよ	ゆけよ	311	將に…するかと	まさに…するかと	322	行れば	やれば	338
少に	まれに	311	恒に	つねに	322	偽	ゐ	339
残なはるる	そこなはるる	311	悦び	よろこび	322	然らば	しからば	339
常規	つねのり	311	把り	とり	322	用つて	もつて	339
偶	たまたま	312	就す	なす	323	過ち	あやまち	340
大宰府	だざいふ	312	児	こ	323	畏る	おそる	340
便ち	すなわち	313	鳴咽	をえつ	323	説苑	ぜいえん	341
睡り	ねむり	313	次る	いたる	323	劉向	りゆうきやう	341
泰く	やすく	313	陳ぶ	のぶ	323	宜帝	せんてい	341
平仄	ひようそく	314	長山	ちやうざん	324	戦国策	せんごくさく	341
掃ふ	はらふ	314	毎に	つねに	324	懐き	いだき	342
承け	うけ	315	負郭	ふくわく	324	丸	たま	342
霜葉	さうえふ	315	種うる	ううる	324	操りて	とりて	342
紅	くれなゐ	315	累ひ	わづらひ	324	弾	ゆみ	342
寒山	かんざん	315	需ゐる	もちゐる	324	樹	き	342
石径	せつけい	315	須ゐ	もちゐ	324	患ひ	うれひ	343
停めて	とめて	315	首	かうべ	324	罷む	やむ	343
晩	くれ	315	許	ばかり	324	若か	しか	344
紅い	あかい	315	暴かに	にはかに	325	者	ば	344
鳥	てう	316	酬ゆる	むくゆる	325	喪ふ	うしなふ	344
下ち	おち	316	貯へ	たくはへ	325	和氏	くわし	344
作り	なり	316	適だ	ただ	326	弥	いよいよ	345
苦だ	はなはだ	316	益す	ます	326	凡そ	およそ	347
潦倒	らうたう	316	肥つて	ふとつて	327	諭す	さとす	347
停む	とどむ	316	遇つた	あつた	328	差ふ	たがふ	347
干宝	かんぼう	317	迭	かたみ	328	奚為れぞ	なんすれぞ	347
少くして	わかくして	318	志す	しるす	330	漁父	ぎよほ	349
畝	ぼ	318	佐藤春夫	さとうはるお	330	与	や	350
鹿	ろく	318	太宰治	だざいおさむ	330	清む	すむ	350
随ふ	したがふ	318	黒田真美子	くろだまみこ	330	醒む	さむ	350
亡する	しする	318	仲尼	ちゆうじ	331	見	る	350

漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁	漢字	音訓	頁
弾き	はじき	350	詞	ことば	363	湯浅邦弘	ゆあさくにひろ	380
湘流	しやうりう	351	鄴城	げふじやう	363	管鮑	くわんぱう	382
滄浪	さうらう	351	御宇	ぎよう	365	糾	きう	382
濯ふ	あらふ	351	女	むすめ	365	召忽	せうこつ	382
幾何	いくばく	352	度る	わたる	365	鮑叔	ほうしゆく	382
良に	まことに	352	飲び	よろこび	365	陰か	ひそか	382
以	ゆゑ	352	粧ひ	よそほひ	366	將ゐ	ひきゐ	382
召く	まねく	352	列ぬ	つらぬ	366	詳り	いつはり	382
大塊	たいくわい	352	士	くに	366	距む	こぼむ	383
転た	うたた	352	足か	あか	366	遺りて	おくりて	383
如し	もし	352	動し	どよし	366	堂阜	だうふ	384
文選	もんぜん	352	宛転	ゑんてん	366	脱き	とき	384
沈香亭	じんこうてい	352	委て	すて	366	穎上	えいじやう	384
肌	き	354	安禄山	あんろくざん	366	謀	はかりごと	384
歳	とし	354	旋り	めぐり	367	顛れ	あらはれ	385
当つ	あつ	354	信せ	まかせ	367	世	よよ	385
嗣ぎ	つぎ	354	未央	びあう	367	有つ	たもつ	385
貌	かたち	354	挑げ	かかげ	368	頃く	しばらく	386
更へ	かへ	355	与共にせん	ともにせん	368	会	たまたま	387
居り	をり	355	教む	しむ	368	予め	あらかじめ	387
徒し	うつりし	356	電	いなづま	368	七首	ひしゆ	387
缶	ふ	356	偏し	あまねし	368	提げて	ひつさげて	388
齒	よはひ	356	膚	はだへ	369	徴	ち	388
後れ	おくれ	357	貌	かんばせ	369	恐懼	きようく	389
夫の	かの	357	参差	しんし	369	咸陽	かんやう	389
側ら	かたはら	358	聞道く	きくならく	369	陛	きざはし	389
式して	しよくして	358	両つ	ふたつ	369	発く	ひらく	390
耄	いつ	358	將つて	もつて	369	環り	めぐり	390
昔者	むかし	358	將て	もて	369	卒か	にはか	390
識せ	しるせ	358	会ず	かならず	370	尺	せき	390
檀弓	だんぐう	358	期	とき	370	陳なり	つらなり	390
楽府	がふ	359	命婦	みやうぶ	372	夏無且	かむしよ	391
桃夭	たうえう	360	筋	すぢ	372	提つ	なげうつ	391
帰ぐ	とつぐ	360	翼	はね	372	廢る	たふる	391
宜しからん	よろしからん	360	後涼殿	こうろうでん	372	大木康	おおきやすし	392
阻しく	けはしく	361	易ふる	かふる	374	雅	みやび	394
晩れ	くれ	361	不詳	ふしやう	375	太安万侶	おほのやすまろ	395
道ふ	いふ	361	嘗試みに	こころみに	376	出雲国	いずものくに	395
被ひ	おほひ	362	寧ろ	むしろ	377	小野岑守	おののみねもり	396
総て	すべて	362	説び	よろこび	378	順	したごう	396
故より	もとより	362	畜ふ	やしなふ	378	打聞	うちぎき	397
匹ひ	たぐひ	362	死され	ころされ	378	北畠親房	きたばたけちかふさ	399
垂んとして	なんなんとして	362	疑し	ちかし	379	虚栗	みなしぐり	400
且く	しばらく	362	振ひ	すくひ	379	出世景清	しゆつせかげきよ	400

漢字	音訓	頁
世間子息氣質	せけんむすこかたぎ	400
国性爺合戦	こくせんやかっせん	400
手習鑑	てならいかのみ	401
呉陵軒可有	ごりようけんあるべし	401
金々先生栄花夢	きんきんせんせいえいがのゆめ	401
江戸生艶氣權焼	えどうまれうわきのかはやき	401
新花摘	しんはなつみ	401
四谷	よつや	401
戯作	げさく	401
草双紙	くさぞうし	401
洒落	しやれ	401
海道下	かいだうくだり	413
閑かさ	しづかさ	419
釣瓶	つるべ	419
歩行	かち	419
独楽	こま	419
書初	かきぞめ	419
海老	えび	419
陽炎	かげろう	419
雪解	ゆきどけ	419
公魚	わかさぎ	419
雲雀	ひばり	419
沈丁花	じんちようげ	419
蝸牛	かたつむり	419
海月	くらげ	419
百日紅	さるすべり	419
紫陽花	あじさい	419
向日葵	ひまわり	419
案山子	かかし	419
啄木鳥	きつつき	419
秋刀魚	さんま	419
南瓜	かぼちや	419
銀杏	いちよう	419
河豚	ふぐ	419
山茶花	さざんか	419
邪	か／や	420
与	か／や	420
何くにか	いづくにか	421
何若	いかん	421
遣む	しむ	422
今：ば	いま：ば	422
況んや	いはんや	423
直だ	ただ	423
徒だ	ただ	423

出 典 一 覧 表

[国語教材]

申 請 図 書			出 典					備考
ページ	名 称	種別	名 称	ページ	著 者 等	発 行 者	発行年次等	
12	古今著聞集	国語教材	日本古典文学大系84	168	橘成季	岩波書店	1966年	
15	古今著聞集	国語教材	日本古典文学大系84	160～161	橘成季	岩波書店	1966年	
15	後拾遺和歌集	国語教材	新日本古典文学大系8	186	和泉式部	岩波書店	1994年	
15	金葉和歌集	国語教材	新日本古典文学大系9	183	和泉式部	岩波書店	1989年	
16～17	沙石集	国語教材	日本古典文学大系85	240～241	無住	岩波書店	1966年	
18～19	今物語	国語教材	今物語(講談社学術文庫)	69～70	未詳	講談社	1998年	
22～29	徒然草	国語教材	新版 徒然草(角川ソフィア文庫)	14、33、78～80、19～20、37～38	兼好法師	KADOKAWA	2015年	
30～33	方丈記	国語教材	日本古典文学大系30	23～25	鴨長明	岩波書店	1957年	
36～41	伊勢物語	国語教材	新日本古典文学大系17	79～80、83～84、160～161	未詳	岩波書店	1997年	
42～43	大和物語	国語教材	新編日本古典文学全集12	391～392	未詳	小学館	1994年	
46～54	枕草子	国語教材	新日本古典文学大系25	50～52、28、30～31、238～240、 146～147、174～175	清少納言	岩波書店	1991年	
58～67	源氏物語	国語教材	新編日本古典文学全集20	17～20、41～44、205～209	紫式部	小学館	1994年	
75～86	大鏡	国語教材	新編日本古典文学全集34	13～15、21、318～321、44～47、 324～326	未詳	小学館	1996年	
92～95	紫式部日記	国語教材	新編日本古典文学全集26	150～152、208～209	紫式部	小学館	1994年	
96～99	更級日記	国語教材	新編日本古典文学全集26	279～281、297～299	菅原孝標女	小学館	1994年	
108～115	平家物語	国語教材	新日本古典文学大系44	5	未詳	岩波書店	1991年	
		国語教材	新日本古典文学大系45	48～50、298～300	未詳	岩波書店	1993年	
100～101	建礼門院右京大夫集	国語教材	和歌文学大系23	137～139	建礼門院右京大夫	明治書院	2001年	
102～104	十六夜日記	国語教材	新編日本古典文学全集48	281～282、286～287	阿仏尼	小学館	1994年	
104	伊勢物語	国語教材	新日本古典文学大系17	88	未詳	岩波書店	1997年	
122	あかねさす	国語教材	新編日本古典文学全集6	36～37	額田王	小学館	1994年	
122	紫草の	国語教材	新編日本古典文学全集6	37	大海人皇子	小学館	1994年	
122	憶良らは	国語教材	新編日本古典文学全集6	206	山上憶良	小学館	1994年	
122	み吉野の	国語教材	新編日本古典文学全集7	113	山部赤人	小学館	1995年	
123	石見の海	国語教材	新編日本古典文学全集6	100～101	柿本人麻呂	小学館	1994年	
123	石見のや・小竹の葉は	国語教材	新編日本古典文学全集6	101～102	柿本人麻呂	小学館	1994年	
123	春の野に	国語教材	新編日本古典文学全集9	363	大伴家持	小学館	1996年	
124	信濃道は	国語教材	新編日本古典文学全集8	472	(東歌)	小学館	1995年	
124	父母が	国語教材	新編日本古典文学全集9	393	(防人歌)	小学館	1996年	
125	やまと歌は	国語教材	新編日本古典文学全集11	17	紀貫之	小学館	1994年	
126	春の夜の	国語教材	新編日本古典文学全集11	44	凡河内躬恒	小学館	1994年	
126	蓮葉の	国語教材	新編日本古典文学全集11	87	僧正遍昭	小学館	1994年	
126	ひさかたの	国語教材	新編日本古典文学全集11	97	壬生忠岑	小学館	1994年	
126	冬ながら	国語教材	新編日本古典文学全集11	143	清原深養父	小学館	1994年	
126	むすぶ手の	国語教材	新編日本古典文学全集11	171	紀貫之	小学館	1994年	
127	ほととぎす	国語教材	新編日本古典文学全集11	196	よみ人知らず	小学館	1994年	
127	色見えて	国語教材	新編日本古典文学全集11	303	小野小町	小学館	1994年	
128	春の夜の	国語教材	新編日本古典文学全集43	32	藤原定家	小学館	1995年	

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
128	秋更けぬ	国語教材	新編日本古典文学全集43	157	後鳥羽院	小学館	1995年	
128	明けばまた	国語教材	新編日本古典文学全集43	279	藤原家隆	小学館	1995年	
128	玉の緒よ	国語教材	新編日本古典文学全集43	305	式子内親王	小学館	1995年	
129	下燃えに	国語教材	新編日本古典文学全集43	318	藤原俊成女	小学館	1995年	
129	吉野山	国語教材	新編日本古典文学全集43	469	西行法師	小学館	1995年	
131	雪月花	国語教材	日本古典文学大系92	37	松永貞徳	岩波書店	1964年	
131	年の内へ	国語教材	日本古典文学大系92	46	北村季吟	岩波書店	1964年	
131	海は少し	国語教材	日本古典文学全集42	84	西山宗因	小学館	1972年	
131	浮き世の月	国語教材	日本古典文学大系92	57	井原西鶴	岩波書店	1964年	
132	奈良七重	国語教材	日本古典文学大系45	49	松尾芭蕉	岩波書店	1962年	
132	応々と	国語教材	日本古典文学大系92	100	向井去来	岩波書店	1964年	
132	梅一輪	国語教材	日本古典文学大系92	95	服部嵐雪	岩波書店	1964年	
132	夕顔や	国語教材	日本古典文学大系92	152	千代女	岩波書店	1964年	
132	初恋や	国語教材	古典俳文学大系13	399	炭太祇	集英社	1970年	
133	愁ひつつ	国語教材	日本古典文学大系58	128	与謝蕪村	岩波書店	1959年	
133	月や霞	国語教材	日本古典文学全集42	326	上田秋成	小学館	1972年	
133	青海苔や	国語教材	日本古典文学大系92	180	高井几董	岩波書店	1964年	
133	仰のけに	国語教材	日本古典文学全集42	430	小林一茶	小学館	1972年	
136～137	発心集	国語教材	新潮日本古典集成5	174～176	鴨長明	新潮社	1976年	
138～139	今昔物語集	国語教材	新日本古典文学大系36	438～439	未詳	岩波書店	1994年	
140～142	宇治拾遺物語	国語教材	新日本古典文学大系42	61～63	未詳	岩波書店	1990年	
144～150	枕草子	国語教材	新日本古典文学大系25	222～224、231～232、135～136、321	清少納言	岩波書店	1991年	
151	十訓抄	国語教材	新編日本古典文学全集51	56～57	未詳	小学館	1997年	
156～159	蜻蛉日記	国語教材	新編日本古典文学全集13	99～101、148～149	藤原道綱母	小学館	1995年	
160～163	和泉式部日記	国語教材	新編日本古典文学全集26	17～19、53～55	和泉式部	小学館	1994年	
164～166	讃岐典侍日記	国語教材	新編日本古典文学全集26	395～398	藤原長子	小学館	1994年	
170～173	源氏物語	国語教材	新編日本古典文学全集20	164～167	紫式部	小学館	1994年	
174	江談抄	国語教材	新日本古典文学大系32	83～84	大江匡房	岩波書店	1997年	
176～178	夕顔	国語教材	源氏物語 九つの変奏	65～69	江國香織	新潮社	2011年	
180～211	源氏物語	国語教材	新編日本古典文学全集21	22～24、37～41、198～203	紫式部	小学館	1995年	
		国語教材	新編日本古典文学全集22	450～454	紫式部	小学館	1996年	
		国語教材	新編日本古典文学全集23	63～67、140～142、503～506	紫式部	小学館	1996年	
		国語教材	新編日本古典文学全集24	136～140	紫式部	小学館	1997年	
218～220	無名草子	国語教材	新編日本古典文学全集40	266～268、276～277	未詳	小学館	1999年	
222	紫式部日記	国語教材	新編日本古典文学全集26	202	紫式部	小学館	1994年	
224	俊頼髓脳	国語教材	新編日本古典文学全集87	237～238	源俊頼	小学館	2002年	
226～227	無名抄	国語教材	無名抄(角川ソフィア文庫)	76～78	鴨長明	KADOKAWA	2013年	
228～229	毎月抄	国語教材	新編日本古典文学全集87	502～503	藤原定家	小学館	2002年	
232～245	大鏡	国語教材	新編日本古典文学全集34	73～76、149～152、380～382、98～100、115～116、273～274	未詳	小学館	1996年	
248～250	風姿花伝	国語教材	日本古典文学大系65	343～346	世阿弥	岩波書店	1961年	

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
251～253	去来抄	国語教材	新編日本古典文学全集88	429、444～445、523	向井去来	小学館	2001年	
254～255	三冊子	国語教材	新編日本古典文学全集88	578～579	服部土芳	小学館	2001年	
256～257	難波土産	国語教材	日本古典文学大系50	358～359	三木貞成	岩波書店	1959年	
258～259	源氏物語玉の小櫛	国語教材	日本古典文学大系94	101～102	本居宣長	岩波書店	1966年	
212～215	とりかへばや物語	国語教材	新編日本古典文学全集39	170～173	未詳	小学館	2002年	
262	推敲	国語教材	唐詩紀事(初版)	巻40 613	計有功	中華書局	1972年	
263	呉越同舟	国語教材	十一家注孫子(第2刷)	巻下 197	孫武	中華書局	1974年	
264	嬰逆鱗	国語教材	韓非子集釈(初版)	巻4 223～224	韓非	上海人民出版社	1974年	
265	知音	国語教材	呂氏春秋(四部叢刊本)(初版)	第22冊 81	呂不韋	商務印書館	1979年	
268～269	鼓腹擊壤	国語教材	十八史略(漢文大系本)(増補版第5刷)	第5巻 8～9	曾先之	富山房	1990年	
270～271	莫敢飾詐	国語教材	十八史略(漢文大系本)(初版)	第5巻 57～58	曾先之	富山房	1910年	
272～273	鶏鳴狗盜	国語教材	十八史略(漢文大系本)(第9刷)	第5巻 60～61	曾先之	富山房	1990年	
274	読孟嘗君伝	国語教材	臨川先生文集(四部叢刊本)(第2版)	第46冊 456	王安石	商務印書館	1967年	
276～277	背水之陣	国語教材	十八史略(漢文大系本)(第4刷)	第5巻 27～28	曾先之	富山房	1911年	
280～281	雑説	国語教材	昌黎先生文集(四部叢刊本)(初版)	第34冊 100～101	韓愈	商務印書館	1979年	
282～283	黔之驢	国語教材	柳先生文集(四部叢刊本)(初版)	第35冊 103	柳宗元	商務印書館	1979年	
284～285	壳油翁	国語教材	欧陽文忠公文集 (四部叢刊本)(初版)	第45冊 980～981	欧陽脩	商務印書館	1979年	
			(唐宋史料筆記叢刊)(第2刷)	60～61				
288～296	鴻門之会	国語教材	史記(史記会注考証)(初版)	巻7 26～35	司馬遷	芸文印書館	1972年	
297～301	四面楚歌	国語教材	史記(史記会注考証)(初版)	巻7 68～73	司馬遷	芸文印書館	1972年	
306	独坐敬亭山	国語教材	李太白集(四部叢刊本)(初版)	第32冊	李白	商務印書館	1979年	
306	秋風引	国語教材	劉夢得文集(四部叢刊本)(初版)	第35冊	劉禹錫	商務印書館	1979年	
307	九月九日憶山東兄弟	国語教材	王右丞集(四部叢刊本)(初版)	第33冊	王維	商務印書館	1979年	
307	磧中作	国語教材	岑嘉州詩(四部叢刊本)(初版)	第33冊 54	岑参	商務印書館	1979年	
308	除夜寄弟妹	国語教材	白氏文集歌詩索引(初版)	下冊 150	白居易	同朋舎出版	1989年	
308～309	江村	国語教材	杜工部集(四部叢刊本)(初版)	第32冊 137	杜甫	商務印書館	1979年	
310	不出門	国語教材	日本古典文学大系72(第6刷)	481～482	菅原道真	岩波書店	1974年	
310～311	冬夜讀書	国語教材	江戸詩人選集第4巻(初版)	81～82	菅茶山	岩波書店	1990年	
311	送夏目漱石之伊予	国語教材	子規全集第8巻(初版)	211	正岡子規	講談社	1976年	
313	香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁	国語教材	白氏文集(四部叢刊本)(初版)	第36冊	白居易	商務印書館	1979年	
318～319	織女	国語教材	搜神記(初版)	巻1 14～15	干宝	中華書局	1979年	
320～321	壳鬼	国語教材	搜神記(初版)	巻16 199	干宝	中華書局	1979年	
322～323	買粉児	国語教材	古小説鉤沈	254	魯迅	人民文学出版社	1951年	
324～326	酒虫	国語教材	聊齋誌異(会校会注会評本)	巻5 607～608	蒲松齡	上海古籍出版社	1986年	
327～328	酒虫	国語教材	芥川龍之介全集第1巻(第2刷)	181～182	芥川龍之介	岩波書店	1982年	
332～335	論語	国語教材	論語(十三經注疏)(3版)	第10冊	孔子	芸文印書館	1965年	
336～338	孟子	国語教材	孟子(十三經注疏)(再版)	第8冊	孟軻	新文豊出版	1978年	
339	荀子	国語教材	荀子集解(漢文大系本)(増補版第5刷)	第15巻 巻17 1～2	荀況	富山房	1984年	
342～343	不顧後患	国語教材	説苑(増訂漢魏叢書)(初版)	第34冊 925	劉向	大化書局	1989年	
344～345	不若人有其宝	国語教材	新序(増訂漢魏叢書)(初版)	第34冊 825	劉向	大化書局	1989年	

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
346～347	不死之道	国語教材	列子(漢文大系本)(増補版第3刷)	第13巻 22～23	列禦寇	富山房	1978年	
350～351	漁父辞	国語教材	楚辞(四部叢刊本)(初版)	巻7 96～97	屈原	商務印書館	1979年	
352	春夜宴従弟桃花園序	国語教材	李太白文集(四部叢刊本)(初版)	第32冊 368	李白	商務印書館	1979年	
354～357	捕蛇者説	国語教材	柳先生文集(四部叢刊本)(初版)	第35冊 89	柳宗元	商務印書館	1979年	
358	礼記	国語教材	礼記(十三経注疏)(3版)	第6冊 193～194	戴聖	芸文印書館	1965年	
360	桃夭	国語教材	詩経(十三経注疏)(3版)	第3冊 37	孔子	芸文印書館	1965年	
361	行行重行行	国語教材	文選(四部叢刊本)(初版)	第92冊 537	昭明太子	商務印書館	1979年	
362	責子	国語教材	箋註陶淵明集(四部叢刊本)(初版)	第30冊	陶潜	商務印書館	1979年	
362～363	石壕吏	国語教材	杜工部集(四部叢刊本)(初版)	第32冊 255	杜甫	商務印書館	1979年	
365～370	長恨歌	国語教材	白氏文集(四部叢刊本)(初版)	第36冊 63～64	白居易	商務印書館	1979年	
372	源氏物語	国語教材	新編日本古典文学全集20	33～35	紫式部	小学館	1994年	
374	老子(大道廃有仁義)	国語教材	老子翼(漢文大系本)(増補版第5刷)	第9巻 巻2 2	老子	富山房	1984年	
374～375	老子(天下莫柔弱於水)	国語教材	老子翼(漢文大系本)(増補版第6刷)	第9巻 巻4 29	老子	富山房	1988年	
375	老子(無用之用)	国語教材	老子翼(漢文大系本)(増補版第5刷)	第9巻 巻1 19	老子	富山房	1984年	
376～377	莊子	国語教材	莊子(漢文大系本)(増補版第6刷)	第9巻	莊周	富山房	1988年	
378～379	韓非子	国語教材	韓非子(四部叢刊本)(初版)	第18冊	韓非	商務印書館	1979年	
382～385	管鮑之交	国語教材	史記(史記会注考証)(再版)	巻32 16～19 巻62 2～4 5～7、9～11	司馬遷	宏業書局	1994年	
386～391	荊軻	国語教材	史記(史記会注考証)(初版)	巻86 20～36	司馬遷	芸文印書館	1972年	

※上記以外のものについては、編集委員による書き下ろしである。

〔図・地図〕

※自社で作成。

[写真]

申請図書		出典					備考	
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
見返③	梅	写真						PIXTA 46652602
見返③	桜	写真						PIXTA 54974908
見返③	藤	写真						PIXTA 30824691
見返③	橘	写真						フォトオリジナル 4165735
見返③	梨	写真						PIXTA 7140369
見返③	桐	写真						PIXTA 38332964
見返③	棟	写真						PIXTA 17605054
12	『十訓抄』版本の挿絵	写真		卷三			1721年	国立公文書館
13	天橋立	写真						PIXTA 41057825
17	平兼盛	写真	『佐竹本三十六歌仙絵』					MOA美術館
17	壬生忠見	写真	『佐竹本三十六歌仙絵』					個人蔵
22	兼好法師(伝狩野探幽筆)	写真			伝狩野探幽			神奈川県立金沢文庫
23	(月)	写真						PIXTA 547695
26	(かげろふ)	写真						関根一希・東城幸治
27	現在のあだし野(念仏寺)	写真						PIXTA 12063174
30	鴨長明(伝土佐広周筆)	写真			伝土佐広周			神宮文庫
31	大福光寺本『方丈記』	写真						大福光寺
36	初冠(奈良絵本『伊勢物語』)	写真	奈良絵本『伊勢物語』					『日本古典籍データセット』(国文学研究資料館蔵)
38	通い路の開守(模本『伊勢物語絵巻』)	写真	模本『伊勢物語絵巻』					東京国立博物館/DNPアートコミュニケーションズ
40	小野の雪(模本『伊勢物語絵巻』)	写真	模本『伊勢物語絵巻』					東京国立博物館/DNPアートコミュニケーションズ
43	(姨捨山)	写真						PIXTA 46722226
46	ほととぎす	写真						PIXTA 58441328
48	網代(『石山縁起』)	写真						国立国会図書館デジタル化資料
64	脇息	写真	桐鳳風蔀絵脇息					ColBase
67	若紫(『源氏物語色紙帖』土佐光吉筆)	写真			土佐光吉			京都国立博物館
70	夕顔	写真						国文学研究資料館
70	藤壺の宮	写真						国文学研究資料館
70	光源氏	写真						国文学研究資料館
70	朧月夜	写真						国文学研究資料館
71	葵の上	写真						国文学研究資料館
71	明石の君	写真						国文学研究資料館
71	紫の上	写真						国文学研究資料館
71	六条の御息所	写真						国文学研究資料館
72	柏木	写真						国文学研究資料館
72	女三の宮	写真						国文学研究資料館
72	光源氏	写真						国文学研究資料館
72	落葉の宮	写真						国文学研究資料館
72	雲居の雁	写真						国文学研究資料館
72	夕霧	写真						国文学研究資料館
72	紫の上	写真						国文学研究資料館
73	大君	写真						国文学研究資料館
73	中の君	写真						国文学研究資料館
73	匂宮	写真						国文学研究資料館
73	薫	写真						国文学研究資料館
73	浮舟	写真						国文学研究資料館
76	雲林院の菩提講(『大鏡絵詞』)	写真	『大鏡絵詞』					国立歴史民俗博物館
80	(高御座)	写真			岡本茂男			宮内庁京都事務所・岡本写真工房
83	花山天皇の出家(『大鏡絵詞』)	写真	『対話をデザインする』					国立歴史民俗博物館
85	祈禱する安倍晴明(『不動利益縁起絵巻』)	写真	『不動利益縁起絵巻』					ColBase
87	弓争い(『大鏡絵詞』)	写真	『大鏡絵詞』					国立歴史民俗博物館
89	(道長と倫子と彰子)	写真	『紫式部日記絵巻』					ColBase
94	中宮(左)に漢籍を進講する紫式部	写真	『紫式部日記絵巻』					個人蔵
110	忠度の都落ち(『平家物語絵巻』)	写真	『平家物語絵巻』	卷七				林原美術館/DNPアートコミュニケーションズ
112	現在の壇の浦(山口県下関市)	写真						アフロ 13043987
113	壇の浦の戦い(『源平合戦図屏風』)	写真	『源平合戦図屏風』					ColBase
115	能登殿の最期(『平家物語絵巻』)	写真	『平家物語絵巻』	卷十一				林原美術館/DNPアートコミュニケーションズ
118	俱利伽羅の戦い	写真	奈良絵本『平家物語絵巻』	卷七				明星大学
118	屋島の戦い	写真	奈良絵本『平家物語絵巻』	卷十一				明星大学
118	宇治平等院の戦い	写真	奈良絵本『平家物語』	卷四				明星大学

118	壇の浦の戦い	写真	奈良絵本『平家物語絵巻』	巻十一				明星大学	
119	源頼朝	写真	「源頼朝木像」					甲斐善光寺	
119	平清盛	写真	「平清盛公坐像」					六波羅蜜寺	
119	源義経	写真	「源義経画像」					中尊寺	
122	紫草	写真						PIXTA	64053613
123	笹	写真						PIXTA	43656004
124	『万葉集』巻十九	写真	『万葉集』	巻十九				『日本古典籍データベース』(国文学研究資料館蔵)	
125	古今和歌集仮名序(藤原定実筆)	写真			藤原定実			大倉集古館	
126	桂	写真						PIXTA	18296014
127	あやめぐさ	写真						PIXTA	50157774
129	『新古今和歌集』巻十一	写真		巻十一				国立公文書館	017-0337
131	卯木(卯の花)	写真						PIXTA	2215280
132	八重桜	写真						PIXTA	22357944
132	夕顔	写真						PIXTA	58755167
132	(灯籠)	写真						PIXTA	56650253
133	いばら	写真						PIXTA	53250262
133	忘れ潮	写真						PIXTA	67133970
141	「藤原保昌月下弄笛図」(月岡芳年筆)	写真			月岡芳年			国立国会図書館デジタル化資料	
144	(高坏)	写真	朱漆塗高杯					ColBase	
149	「琵琶の御琴 中宮定子」(佐多芳郎筆)	写真			佐多芳郎			個人蔵	
150	「清少納言」(上村松園筆)	写真			上村松園			北野美術館	
153	『この世をば 藤原道長と平安王朝の時代』	写真	『この世をば(上) 藤原道長と平安王朝の時代』	表紙	永井路子	朝日新聞出版	2023年	自社で撮影	
158	泔坏	写真			岡本茂男			宮内庁京都事務所・岡本写真工房	
168	『源氏物語の結婚』	写真	『源氏物語の結婚』	表紙	工藤重矩	中央公論新社	2012年	自社で撮影	
182	車争い(『源氏物語図屏風』)	写真	『源氏物語図屏風』		伝岩佐又兵衛			京都国立博物館	
186	「焰」(上村松園筆)	写真			上村松園			ColBase	
190	須磨(『源氏物語手鑑』土佐光吉筆)	写真	『源氏物語手鑑』		土佐光吉			和泉市久保惣記念美術館	
203	柏木の懸想(『源氏物語図屏風』)	写真	『源氏物語図屏風』					ColBase	
205	脇息	写真	桐鳳庵詩絵脇息					ColBase	
206	紫の上を見守る源氏と明石の中宮(『源氏物語絵巻(御法)』)	写真	『源氏物語絵巻(御法)』					五島美術館	
207	萩	写真						PIXTA	44098581
210	(舞楽「陵王」)	写真	舞楽の陵王					PIXTA	24181401
210	(隠月)	写真						国立音楽大学楽器学資料館	
211	宇治の姫君を垣間見る薫(『源氏物語絵巻(橋姫)』)	写真	『源氏物語絵巻(橋姫)』					徳川美術館/DNPアートコミュニケーションズ	
212	碁を打つなどしてくつろぐ女性(模本『源氏物語絵巻』(竹河二))	写真	『源氏物語絵巻(竹河二)』(模本)					徳川美術館/DNPアートコミュニケーションズ	
212	(御帳台 復元)	写真						国立歴史民俗博物館	
221	「紫式部図」(土佐光起筆)	写真			土佐光起			石山寺	
225	和泉式部(『百人一首図』狩野探幽筆)	写真	『百人一首図』		狩野探幽			ColBase	
226	鶉図(徽宗筆・模写)	写真			徽宗(模写)			ColBase	
228	藤原定家(『新三十六歌仙図帖』狩野探幽筆)	写真	『新三十六歌仙図帖』		狩野探幽			ColBase	
233	『松崎天神縁起絵巻』	写真	『松崎天神縁起絵巻』					防府天満宮	
237	中宮安子の局を訪れる村上天皇(『大鏡絵詞』)	写真	『大鏡絵詞』					国立歴史民俗博物館	
239	鶯宿梅(『大鏡絵詞』)	写真	『大鏡絵詞』					国立歴史民俗博物館	
242	「大堰川遊覧図屏風」(浮田一蕙筆)	写真			浮田一蕙			御寺泉涌寺	
244	道長と隆家(『大鏡絵詞』)	写真	『大鏡絵詞』					国立歴史民俗博物館	
250	世阿弥作「忠度」の一場面	写真						鍬仙会・前島吉裕	
250	能舞台	写真						国立能楽堂	
251	向井去来(栗原信充筆)	写真			栗原信充			国立国会図書館デジタル化資料	
254	「芭蕉翁画像」(小川破笠筆)	写真			小川破笠			芭蕉翁顕彰会(芭蕉翁記念館)	
256	近松門左衛門	写真						大阪歴史博物館	
258	本居宣長自画像	写真	本居宣長六十一歳自画自賛像					本居宣長記念館	
268	堯	写真						国立公文書館	
272	孟嘗君	写真						CPC	PT-13218
276	韓信	写真						国立公文書館	
278	『史記』	写真						東北大学附属図書館	
278	『十八史略』	写真	『十八史略』	表紙	今西凱夫訳、三上英司編	筑摩書房	2014年	自社で撮影	
280	韓愈	写真						ユニフォトプレス	FOE_12134253
281	「人馬図」(趙雍筆)	写真			趙雍			アフロ	15209397
282	柳宗元	写真						アフロ	15209391
284	歐陽脩	写真						アフロ	15056593
285	北宋の銅銭	写真						CPC	YS-91015
290	玉帛	写真						ユニフォトプレス	BAL_FSG5950982

429	かり・かりがね(がん)	写真						PIXTA	50393816
429	かり・かりがね(がん)	写真						PIXTA	54036763
429	しのぶ・しのぶぐさ(のきしのぶ)	写真						PIXTA	62231677
429	しおん	写真						PIXTA	50737039
429	きく	写真						PIXTA	60269619
429	きりぎりす(こおろぎ)	写真						PIXTA	39825264
429	まつむし(すずむし)	写真						PIXTA	12097225
429	ひぐらし	写真						PIXTA	23874784
429	あさじ(ち・ちがや)	写真						PIXTA	50687496
429	もみじ(かえで)	写真						PIXTA	5764219
432	歌合(「天徳内裏歌合復元図」)	写真	「天徳内裏歌合復元図」					京都文化博物館	
432	管弦の遊び(冷泉為恭筆「春秋行楽図」)	写真	「春秋行楽図」	冷泉為恭				MOA美術館	
432	双六盤(上)	写真						ColBase	
432	貝合(下)	写真						ColBase	
432	絵合(『源氏物語団扇画帖』)	写真	『源氏物語団扇画帖』					国文学研究資料館	
432	蹴鞠(『年中行事絵巻』住吉本(巻三))	写真	『年中行事絵巻』住吉本(巻三)					東京国立博物館/DNPアートコミュニケーションズ	
433	葡萄色の小桂・紅梅襲の匂いの桂	写真						風俗博物館	
433	浅縹の小桂・紅の薄様襲の桂	写真						風俗博物館	
434	武官の束帯姿	写真	『有職故実』	第一巻	鈴木敬三	全教図	1983年	全教図	
434	文官の束帯姿	写真	『有職故実』	第一巻	鈴木敬三	全教図	1983年	全教図	
434	直衣	写真	『有職故実』	第一巻	鈴木敬三	全教図	1983年	全教図	
434	狩衣	写真						風俗博物館	
435	女房装束(前)	写真	『有職故実』	第二巻	鈴木敬三	全教図	1984年	全教図	
435	女房装束(後ろ)	写真	『有職故実』	第二巻	鈴木敬三	全教図	1984年	全教図	
435	桂	写真	『有職故実』	第二巻	鈴木敬三	全教図	1984年	全教図	
435	壺装束	写真						風俗博物館	
436	(大鎧姿(前面))	写真	『有職故実』	第三巻	鈴木敬三	全教図	1983年	全教図	
436	(大鎧姿(後面))	写真	『有職故実』	第三巻	鈴木敬三	全教図	1983年	全教図	
436	兵庫鎖の太刀	写真	三鱗紋兵庫鎖太刀					ColBase	
436	(馬具をつけた馬)	写真	大和鞍					馬の博物館	
437	出産(『北野天神縁起絵巻』)	写真	『北野天神縁起絵巻』	巻八				北野天満宮	
437	五十日の祝い(『紫式部日記絵巻』)	写真	『紫式部日記絵巻』	第二段				五島美術館	
437	初冠(『聖徳太子絵伝』)	写真	『聖徳太子絵伝』	第一幅				ColBase	
437	露頸(『源氏物語絵巻(宿木二)』)	写真	『源氏物語絵巻(宿木二)』					徳川美術館/DNPアートコミュニケーションズ	
437	五十の賀(『北野天神縁起絵巻』)	写真	『北野天神縁起絵巻』	巻二				北野天満宮	
437	野辺送り(『北野天神縁起絵巻』)	写真	『北野天神縁起絵巻』	巻八				北野天満宮	
442	矛	写真						CPC	JB-251b
442	戟	写真						CPC	JB-232
442	戦国時代の兵士	写真						CPC	JBD-890
442	弩	写真						CPC	JB-237
442	盾	写真						CPC	JB-240
442	剣	写真						Colbase	
442	羽觶	写真						ColBase	
442	鼎	写真						Colbase	
443	皇帝の礼装(伝閻立本筆「隋の文帝」)	写真						ユニフォトプレス	9_AKG3808029
443	宮女の服装(伝周昉「簪花仕女図」)	写真						CPC	PT-13211
443	文官の服装(唐・章懐太子墓壁図「迎賓図」)	写真						時事通信社	47375090
443	璧	写真						アフロ	236184882
443	環	写真						CPC	K1C000977N000000000PAC
443	玦	写真						ユニフォトプレス	3.5950982
443	琴	写真						サイネットフォト	ABM110486352
443	琵琶	写真						Colbase	
443	瑟	写真						アーテファクトリー	CPC KJ-46
443	筑	写真						CPC	JB-1045
見返⑥	易水	写真						アフロ	239033208
見返⑥	烏江	写真						CPC	YS-2804a
見返⑥	函谷関	写真						PIXTA	28852839
見返⑥	廬山(香炉峰)	写真						アフロ	142015711
見返⑥	蜀の栈道	写真						CPC	YS-89574b

- 4 (1) 写真等については、肖像権等の権利処理を必要に応じて行うこと。
(2) 著作物の掲載に当たっては、著作権法第33条に基づき、掲載する旨を著作者に通知するとともに、補償金を著作権者に支払う必要があることに留意すること(別途契約を締結する場合を除く)。

備考4の内容について確認しました。☑

原典に加除訂正を加えた箇所と加除訂正の理由

単元名	ページ・行	本文	原典	訂正理由
説話(一)	p12・3 p15・上2 p15・上2	参りにたりや 式部が娘、 わづらひけり。〈改行〉	まいりにたるや 同式部がむすめ、	諸本により校訂。 一編の説話として完結性をもたせるため。 わかりやすくするため。以下、改行した箇所については同様の理由による。
随筆(一)	p17・2 p19・6	かく重り侍りぬ 者なりけり。〈このあと原文削除〉	カク思侍リヌ	諸本により校訂。 一編の説話として完結性をもたせるため。
物語(一)	p24・10 p36・11	鼻のほどおごめきて おいつきて	鼻のほどおごめきて をいつきて	注3に示した解釈をしたため。 注5に示した解釈をしたため。
随筆(二)	p46・1 p46・8 p48・2 p48・9 p48・14 p48・14 p50・11 p50・14 p52・9 p54・13	濃きも薄きも紅梅。〈改行なし〉 よにすさまじきものにして、 乳児亡くなりたる産屋。〈このあと原文削除〉 え問ひにだにも問はず。 いとほしう、 すさまじげなり。 十七、八ばかりにやあらむ、 衣の裾にはづれて 大殿籠りたり。 のちのちのは御前に。〈このあと原文削除〉	よにすさまじきものにて、 え問ひだにも問はず、 いとおかしう すさまじげなる。 十七八ばかりやあらん、 衣の裾にかくれて、 御とのごもりたり。	内容として続いているので、わかりやすくするため。以下、改行をはずした箇所については同様の理由による。 諸本により校訂。 採録スペースの関係による。 諸本により校訂。 諸本により校訂。 諸本により校訂。 諸本により校訂。 能因本の本文により校訂。 諸本により校訂。 採録スペースの関係による。
物語(二)	p59・6 p60・7 p65・1 p75・4 p76・2 p76・13 p76・14 p76・15 p82・2	男皇子 もの思ひをぞし給ふ。〈改行なし〉 十ばかりにやあらむ 言ふやう、〈改行なし〉 大宅世継 繁樹 いとあさまじうなりぬ。〈改行なし〉 居寄りなどしけり。〈このあと原文削除〉 懐子と申す。〈このあと原文削除〉	男御子 十ばかりやあらむ 大宅世次 重木	帝の「みこ」については「皇子」「皇女」の表記に統一した。 教科書採録の都合による。 原典の誤りと思われるため。 採録スペースの関係による。以下、会話文の改行については同様の理由による。 一般的な表記に改めた。 一般的な表記に改めた。 教科書採録の都合による。 教科書採録の都合による。
日記(一)	p97・7	いかた	いかだ	伝未詳の地名で、清濁の判断に信憑性がないため。
物語(三)	p108・小題ほか	忠度	忠教	一般的な表記に改めた。
和歌・俳諧	p123・1	妻に別れて	妻を別れて	諸本の校訂に従う。
説話(二)	p136・3 p136・10 p140・2 p140・3 p140・7	なまじひに参り給ふ。〈改行〉道に、 かかる病人ととも うかがひありきけるに、 衣あまた着たりける主の、 我に人こそつきたれと	なまじひに罷りける道に、 かかる非人ととも うかがひあるきけるに、 衣、あまた着たるなるぬしの、 我に人こそ付たると	神宮文庫本の本文により校訂。 教育的配慮による。 諸本により校訂。 諸本により校訂。 諸本により校訂。
随筆(三)	p144・4 p145・10 p151・4	大殿油 をかし。〈このあと原文削除〉 言ひ伝へられけり。	御殿油 いひ伝へられける。	一般的な表記に改めた。 採録スペースの関係による。 教育的配慮による。

単元名	ページ・行	本文	原典	訂正理由
日記(三)	p156・1	九月ばかりになりて	さて、九月ばかりになりて	部分採録のため。
物語(四)	p174・1	寛平法皇、	「資仲卿曰はく、「寛平法皇、	一編の説話として完結性をもたせるため。
	p174・2	月明らかなり。〈このあと原文削除〉		教育的配慮による。
	p174・12	跡なり。〈このあと原文削除〉		一編の説話として完結性をもたせるため。
	p176・15	などと言う。	〈原文では、会話文のあと是一字下げで始まっているが、教科書として読みやすく、また、わかりやすくするため、一字下げをやめ、普通の形に改めた。なお、以後についても同様。〉	教科書として適切な表現に改めた。
	p184・6	御祈り	御祈禱	一般的な表記に改めた。
	p195・2	並びなきことをば	並びなきことは	諸本により校訂。
評論(一)	p212・5	御帳のうちに	御帳のうちにぞ	諸本により校訂。
	p218・1	「すべて、あまりに	また、人、「すべて、あまりに	部分採録のため。
	p222・6	行く末うたてのみ侍るは。	行末うたてのみはべれば、	底本の黒川本の本文が「侍は」であることから、 文意に合わせて「侍るは。」と読むように校訂。
	p224・1	歌のよしあしを知らむことは、ことのほかの 大事なめり。	歌のよしあしをも知らむ事は、ことの ほかのためしなめり。	冷泉家時雨亭文庫本の本文により校訂。
	p226・10	申ししは、〈このあと小題削除〉		教科書採録の都合による。
	p227・3	なりぬる。」とぞ。〈このあと小題削除〉		教科書採録の都合による。
物語(五)	p228・1	本歌取り侍るやうは、	また、本歌取り侍るやうは、	部分採録のため。
	p245・5	乱れ遊ばせ給ひけるさまなど	乱れ遊ばせたまけるさまなど	諸本により校訂。
評論(二)	p248・6	とまるなり。〈このあと原文削除〉		採録スペースの関係による。
	p249・2	相なり。〈このあと原文削除〉		採録スペースの関係による。
	p250・1	いやましにすべし。〈このあと原文削除〉		採録スペースの関係による。
	p254・9	いふべし。〈このあと小題削除〉		教科書採録の都合による。
故事・寓話	p256・3	歌舞伎	哥舞伎	一般的な表記に改めた。
	p262・1	賈島	島	わかりやすくするため。
古代の史話	p268・3	陶唐氏〈このあと原文削除〉		採録スペースの関係による。
	p268・5	三等〈このあと原文削除〉		採録スペースの関係による。
	p276・4	漢三年	三年	抜粋であるので、学習者に理解しやすくするため。
	p276・4	韓信・張耳	信耳	抜粋であるので、学習者に理解しやすくするため。
	p276・4	撃趙〈このあと原文削除〉		『史記』の本文と内容が異なるため。
	p276・5	禦之〈このあと原文削除〉		採録スペースの関係による。
	p276・5	夜半、信伝	夜半伝	原文削除により主語が不明確になったため。
項羽と劉邦	p288・13	楚軍行略定秦地	行略定秦地	わかりやすくするため。
	p292・8	眦	眦	通行本によって改めた。
	p293・6	毫毛	豪毛	一般的表記に改めた。
	p295・4	驪山	麗山	通行本によって改めた。
	p295・7	一双	一壁	通行本によって改めた。
	p300・11	項王	籍	わかりやすくするため。

単元名	ページ・行	本文	原典	訂正理由
漢詩の鑑賞	p307・2	佳節	嘉節	通行本によって改めた。
	p307・6	辭	離	通行本によって改めた。
儒家の思想 逸話	p307・7	人煙	人烟	通行本によって改めた。
	p313・9	何	可	通行本によって改めた。
	p339・上9	犯文乱理	犯分亂理	兪越『諸子平議』によって改めた。
	p345・2	粗	糶	わかりやすくするため。
諸家の文章	p346・1	人有言知不死之道者	人言有不死之道者	「列子集釈」によって改めた。
	p350・7	醜	醜	通行本によって改めた。
	p351・4	乃歌曰	歌曰	通行本によって改めた。
漢詩の鑑賞	p354・3	太医	大医	一般的表記に改めた。
	p355・3	感	戚	p354・8と同じ字に統一した。
	p363・6	惟	所	通行本によって改めた。
	p369・7	欄干	欄干	わかりやすくするため。
道家・法家の 思想	p372・6	枕言にせさせ給ふ。〈このあと原文削除〉		採録スペースの関係による。
	p374・2	知恵	智慧	わかりやすくするため。
	p374・5	於	于	わかりやすくするため。
史記の群像	p374・6	強	疆	わかりやすくするため。
	p382・2	醉殺魯桓公〈このあと原文削除〉		教育的配慮による。
	p382・2	糾	次弟糾	わかりやすくするため、兄弟関係については脚注に 記載した。p382・3「小白」も同様。
	p382・4	鮑叔傅之〈このあと原文削除〉		採録本文と直接関係がないため。
	p384・1	桓公従之〈このあと原文削除〉		採録スペースの関係による。
	p384・6	鮑叔知其賢〈このあと原文削除〉		前後の内容との重複を避けるため。
	p386・3	読書撃剣〈このあと原文削除〉		採録スペースの関係による。以下、削除については同様。
	p391・5	銅柱	桐柱	考証の注によって改めた。

ウェブサイトのアドレスの掲載箇所一覧表

申請図書			学習上の参考にする情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	
1	5	二次元コード		自社ページURL	コンテンツリスト	別紙1添付
	5	URL		自社ページURL	コンテンツリスト	別紙1添付
	表4	二次元コード		自社ページURL	コンテンツリスト	別紙1添付
2	12	二次元コード		自社ページURL	『古今著聞集』小式部内侍が大江山の歌の事 重要古語の確認	別紙2添付
3	16	二次元コード		自社ページURL	『沙石集』歌ゆゑに命を失ふ事 重要古語の確認	別紙3添付
4	18	二次元コード		自社ページURL	『今物語』やさし蔵人 重要古語の確認	別紙4添付
5	22	二次元コード		自社ページURL	『徒然草』よろづのことは、月見るにこそ 重要古語の確認	別紙5添付
6	24	二次元コード		自社ページURL	『徒然草』世に語り伝ふること 重要古語の確認	別紙6添付
7	26	二次元コード		自社ページURL	『徒然草』あだし野の露消ゆるときなく 重要古語の確認	別紙7添付
8	28	二次元コード		自社ページURL	『徒然草』飛鳥川の淵瀬 重要古語の確認	別紙8添付
9	30	二次元コード		自社ページURL	『方丈記』ゆく川の流れ 重要古語の確認	別紙9添付
10	32	二次元コード		自社ページURL	『方丈記』安元の大火 重要古語の確認	別紙10添付
11	33	二次元コード		自社ページURL	参考資料：『方丈記』「日の山の閑居」	別紙11添付
				自社ページURL	参考資料：『方丈記』「結び」	別紙12添付
				自社ページURL	参考資料：草庵図（推定）	別紙13添付
12	36	二次元コード		自社ページURL	『伊勢物語』初冠 重要古語の確認	別紙14添付
13	38	二次元コード		自社ページURL	『伊勢物語』通ひ路の関守 重要古語の確認	別紙15添付
14	40	二次元コード		自社ページURL	『伊勢物語』小野の雪 重要古語の確認	別紙16添付
15	42	二次元コード		自社ページURL	『大和物語』姨捨 重要古語の確認	別紙17添付
16	46	二次元コード		自社ページURL	『枕草子』木の花は 重要古語の確認	別紙18添付
17	48	二次元コード		自社ページURL	『枕草子』すさまじきもの 重要古語の確認	別紙19添付
18	50	二次元コード		自社ページURL	『枕草子』野分のまたの日こそ 重要古語の確認	別紙20添付
19	52	二次元コード		自社ページURL	『枕草子』二月つごもりごろに 重要古語の確認	別紙21添付
20	54	二次元コード		自社ページURL	『枕草子』頭弁の、職に参り給ひて 重要古語の確認	別紙22添付
21	58	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語』光る君誕生 重要古語の確認	別紙23添付
22	61	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語』藤壺の宮の入内 重要古語の確認	別紙24添付
23	64	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語』若紫 重要古語の確認	別紙25添付

申請図書			学習上の参考に供する情報				備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要		
24	69	二次元コード		自社ページURL	参考資料：『源氏物語』「光る君の誕生」本文（続き）	別紙26添付	
25	75	二次元コード		自社ページURL	『大鏡』雲林院の菩提講 重要古語の確認	別紙27添付	
26	78	二次元コード		自社ページURL	『大鏡』道長の豪胆 重要古語の確認	別紙28添付	
27	82	二次元コード		自社ページURL	『大鏡』花山天皇の出家 重要古語の確認	別紙29添付	
28	86	二次元コード		自社ページURL	『大鏡』弓争ひ 重要古語の確認	別紙30添付	
29	92	二次元コード		自社ページURL	『紫式部日記』若宮誕生 重要古語の確認	別紙31添付	
30	94	二次元コード		自社ページURL	『紫式部日記』日本紀の御局 重要古語の確認	別紙32添付	
31	96	二次元コード		自社ページURL	『更級日記』門出 重要古語の確認	別紙33添付	
32	98	二次元コード		自社ページURL	『更級日記』源氏の五十余巻 重要古語の確認	別紙34添付	
33	100	二次元コード		自社ページURL	『建礼門院右京大夫集』大原まうで 重要古語の確認	別紙35添付	
34	102	二次元コード		自社ページURL	『十六夜日記』駿河路 重要古語の確認	別紙36添付	
35	108	二次元コード		自社ページURL	『平家物語』忠度の都落ち 重要古語の確認	別紙37添付	
36	112	二次元コード		自社ページURL	『平家物語』能登殿の最期 重要古語の確認	別紙38添付	
37	117	二次元コード	国立国語研究所	https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/	参考リンク：大英図書館蔵『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』画像		
38	121	二次元コード		自社ページURL	参考資料：近世俳風の比較	別紙39添付	
				自社ページURL	参考資料：主要俳人活動時期一覧	別紙40添付	
39	122	二次元コード		自社ページURL	『万葉集』 重要古語の確認	別紙41添付	
40	125	二次元コード		自社ページURL	『古今和歌集』 重要古語の確認	別紙42添付	
41	128	二次元コード		自社ページURL	『新古今和歌集』 重要古語の確認	別紙43添付	
42	131	二次元コード		自社ページURL	春夏秋冬 重要古語の確認	別紙44添付	
				自社ページURL	参考資料：近世俳風の比較	別紙39添付	
				自社ページURL	参考資料：主要俳人活動時期一覧	別紙40添付	
43	136	二次元コード		自社ページURL	『発心集』叡実、路頭の病者を憐れむ事 重要古語の確認	別紙45添付	
44	138	二次元コード		自社ページURL	『今昔物語集』藤原為時、詩を作りて越前守に任ぜらるる語 重要古語の確認	別紙46添付	
45	140	二次元コード		自社ページURL	『宇治拾遺物語』袴垂、保昌に合ふ事 重要古語の確認	別紙47添付	
46	144	二次元コード		自社ページURL	『枕草子』宮に初めて参りたるころ 重要古語の確認	別紙48添付	
47	146	二次元コード		自社ページURL	『枕草子』大納言殿参り給ひて 重要古語の確認	別紙49添付	
48	148	二次元コード		自社ページURL	『枕草子』御方々、君たち 重要古語の確認	別紙50添付	
49	150	二次元コード		自社ページURL	『枕草子』雪のいと高う降りたるを 重要古語の確認	別紙51添付	

申請図書			学習上の参考に供する情報				備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要		
50	151	二次元コード		自社ページURL	読み比べる・十訓抄 重要古語の確認	別紙52添付	
51	156	二次元コード		自社ページURL	『蜻蛉日記』うつろひたる菊 重要古語の確認	別紙53添付	
52	158	二次元コード		自社ページURL	『蜻蛉日記』泔杯の水 重要古語の確認	別紙54添付	
53	160	二次元コード		自社ページURL	『和泉式部日記』夢よりもはかなき世の中 重要古語の確認	別紙55添付	
54	162	二次元コード		自社ページURL	『和泉式部日記』手枕の袖 重要古語の確認	別紙56添付	
55	164	二次元コード		自社ページURL	『讃岐典侍日記』堀河天皇との別れ 重要古語の確認	別紙57添付	
56	170	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語』夕顔の死 重要古語の確認	別紙58添付	
57	174	二次元コード		自社ページURL	読み比べる・江談抄 重要古語の確認	別紙59添付	
58	180	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語』車争ひ 重要古語の確認	別紙60添付	
59	184	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語』葵の上の出産 重要古語の確認	別紙61添付	
60	188	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語』須磨の秋 重要古語の確認	別紙62添付	
61	193	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語』明石の姫君の入内 重要古語の確認	別紙63添付	
62	197	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語』女三の宮の降嫁 重要古語の確認	別紙64添付	
63	201	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語』柏木の懸想 重要古語の確認	別紙65添付	
64	204	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語』紫の上の死 重要古語の確認	別紙66添付	
65	208	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語』薫と宇治の姫君 重要古語の確認	別紙67添付	
66	212	二次元コード		自社ページURL	『とりかへばや物語』父大納言の苦悩 重要古語の確認	別紙68添付	
67	218	二次元コード		自社ページURL	『無名草子』清少納言 重要古語の確認	別紙69添付	
68	220	二次元コード		自社ページURL	『無名草子』紫式部 重要古語の確認	別紙70添付	
69	222	二次元コード		自社ページURL	読み比べる・紫式部日記 重要古語の確認	別紙71添付	
70	224	二次元コード		自社ページURL	『俊頼髓脳』歌のよしあし 重要古語の確認	別紙72添付	
71	226	二次元コード		自社ページURL	『無名抄』深草の里 重要古語の確認	別紙73添付	
72	228	二次元コード		自社ページURL	『毎月抄』本歌取り 重要古語の確認	別紙74添付	
73	232	二次元コード		自社ページURL	『大鏡』菅原道真の左遷 重要古語の確認	別紙75添付	
74	234	二次元コード		自社ページURL	参考資料：『大鏡』の続き1「内裏の裏板」（左大臣時平）	別紙76添付	
				自社ページURL	参考資料：『大鏡』の続き2「雷神となった道真」（左大臣時平）	別紙77添付	
75	235	二次元コード		自社ページURL	『大鏡』村上天皇と中宮安子 重要古語の確認	別紙78添付	
76	238	二次元コード		自社ページURL	『大鏡』鶯宿梅 重要古語の確認	別紙79添付	
77	240	二次元コード		自社ページURL	『大鏡』佐理の大式 重要古語の確認	別紙80添付	

申請図書			学習上の参考に供する情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	
78	242	二次元コード		自社ページURL	『大鏡』三舟の才 重要古語の確認	別紙81添付
79	244	二次元コード		自社ページURL	『大鏡』道長と隆家 重要古語の確認	別紙82添付
80	246	二次元コード		自社ページURL	官位相当表	別紙83添付
81	248	二次元コード		自社ページURL	『風姿花伝』 重要古語の確認	別紙84添付
82	251	二次元コード		自社ページURL	『去来抄』行く春を 重要古語の確認	別紙85添付
83	252	二次元コード		自社ページURL	『去来抄』下京や 重要古語の確認	別紙86添付
84	253	二次元コード		自社ページURL	『去来抄』発句論 重要古語の確認	別紙87添付
85	254	二次元コード		自社ページURL	『三冊子』風雅の誠 重要古語の確認	別紙88添付
86	256	二次元コード		自社ページURL	『難波土産』虚実皮膜論 重要古語の確認	別紙89添付
87	258	二次元コード		自社ページURL	『源氏物語玉の小櫛』もののはれ論 重要古語の確認	別紙90添付
88	262	二次元コード		自社ページURL	「推敲」 基本句形の確認	別紙91添付
				自社ページURL	参考資料：科挙	別紙92添付
89	263	二次元コード		自社ページURL	「呉越同舟」 基本句形の確認	別紙93添付
90	264	二次元コード		自社ページURL	「嬰逆鱗」 基本句形の確認	別紙94添付
91	265	二次元コード		自社ページURL	「知音」 基本句形の確認	別紙95添付
92	266	二次元コード		自社ページURL	参考資料：張隠『文士伝』	別紙96添付
				自社ページURL	参考資料：『漢書』韓信伝	別紙97添付
				自社ページURL	参考資料：『易経』繫辞伝上	別紙98添付
				自社ページURL	参考資料：『史記』蔡沢列伝	別紙99添付
				自社ページURL	参考資料：『莊子』大宗師編	別紙100添付
				自社ページURL	参考資料：白居易「倣陶潜体詩十六首」其七	別紙101添付
93	268	二次元コード		自社ページURL	「鼓腹擊壤」 基本句形の確認	別紙102添付
94	270	二次元コード		自社ページURL	「莫敢飾詐」 基本句形の確認	別紙103添付
95	272	二次元コード		自社ページURL	「鷄鳴狗盜」 基本句形の確認	別紙104添付
96	276	二次元コード		自社ページURL	「背水之陣」 基本句形の確認	別紙105添付
97	280	二次元コード		自社ページURL	「雑説」 基本句形の確認	別紙106添付
98	282	二次元コード		自社ページURL	「黔之驢」 基本句形の確認	別紙107添付
99	284	二次元コード		自社ページURL	「売油翁」 基本句形の確認	別紙108添付
				自社ページURL	参考資料：『莊子』養生主編	別紙109添付

申請図書			学習上の参考に供する情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	
				自社ページURL	参考資料：『莊子』天道編	別紙110添付
100	288	二次元コード		自社ページURL	「項羽、大いに怒る」 基本句形の確認	別紙111添付
				自社ページURL	「剣の舞」 基本句形の確認	別紙112添付
				自社ページURL	「樊噲、頭髮 上指す」 基本句形の確認	別紙113添付
				自社ページURL	「沛公、虎口を脱す」 基本句形の確認	別紙114添付
101	297	二次元コード		自社ページURL	「時 利あらず」 基本句形の確認	別紙115添付
				自社ページURL	「項王の最期」 基本句形の確認	別紙116添付
102	304	二次元コード		自社ページURL	参考資料：『史記』高祖本紀	別紙117添付
103	306	二次元コード		自社ページURL	「独坐敬亭山」 基本句形の確認	別紙118添付
				自社ページURL	「秋風引」 基本句形の確認	別紙119添付
				自社ページURL	「磧中作」 基本句形の確認	別紙120添付
				自社ページURL	「除夜寄弟妹」 基本句形の確認	別紙121添付
				自社ページURL	「江村」 基本句形の確認	別紙122添付
				自社ページURL	「独坐敬亭山」 押韻確認問題	別紙123添付
				自社ページURL	「秋風引」 押韻確認問題	別紙124添付
				自社ページURL	「九月九日憶山東兄弟」 押韻確認問題	別紙125添付
				自社ページURL	「磧中作」 押韻確認問題	別紙126添付
				自社ページURL	「除夜寄弟妹」 押韻確認問題	別紙127添付
				自社ページURL	「江村」 押韻確認問題	別紙128添付
				自社ページURL	参考資料：漢詩のきまり	別紙129添付
104	310	二次元コード		自社ページURL	「不出門」 基本句形の確認	別紙130添付
				自社ページURL	「送夏目漱石之伊予」 基本句形の確認	別紙131添付
				自社ページURL	「不出門」 押韻確認問題	別紙132添付
				自社ページURL	「冬夜読書」 押韻確認問題	別紙133添付
				自社ページURL	「送夏目漱石之伊予」 押韻確認問題	別紙134添付
			太宰府天満宮	https://www.dazaifutenmangu.or.jp/about/sugawaranomichizanekou	参考リンク：菅原道真と大宰府	
			古都大宰府保存協会	https://www.kotodazaifu.net/	参考リンク：古都大宰府	
			九州国立博物館	https://www.kyuhaku.jp/dazaifu/	参考リンク：西都太宰府	

申請図書			学習上の参考に供する情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	
			太宰府市日本遺産活性化協議会	https://www.dazaifu-japan-heritage.jp/intro/#step1	参考リンク：日本遺産太宰府	
			観世音寺	https://kanzeonji.net/	参考リンク：観世音寺	
105	318	二次元コード		自社ページURL	「織女」 基本句形の確認	別紙135添付
106	320	二次元コード		自社ページURL	「売鬼」 基本句形の確認	別紙136添付
107	322	二次元コード		自社ページURL	「買粉児」 基本句形の確認	別紙137添付
108	324	二次元コード		自社ページURL	「酒虫」 基本句形の確認	別紙138添付
109	332	二次元コード		自社ページURL	「論語」 基本句形の確認	別紙139添付
110	336	二次元コード		自社ページURL	「孟子」 基本句形の確認	別紙140添付
111	342	二次元コード		自社ページURL	「不顧後患」 基本句形の確認	別紙141添付
112	344	二次元コード		自社ページURL	「不若人有其宝」 基本句形の確認	別紙142添付
113	346	二次元コード		自社ページURL	「不死之道」 基本句形の確認	別紙143添付
114	348	二次元コード		自社ページURL	参考資料：『莊子』山木編	別紙144添付
115	350	二次元コード		自社ページURL	「漁父辞」 基本句形の確認	別紙145添付
116	352	二次元コード		自社ページURL	「春夜宴従弟桃花園序」 基本句形の確認	別紙146添付
117	354	二次元コード		自社ページURL	「捕蛇者説」 基本句形の確認	別紙147添付
118	360	二次元コード		自社ページURL	「桃夭」 押韻確認問題	別紙148添付
				自社ページURL	「行行重行行」 押韻確認問題	別紙149添付
				自社ページURL	「責子」 押韻確認問題	別紙150添付
				自社ページURL	「石壕吏」 押韻確認問題	別紙151添付
				自社ページURL	「長恨歌」 押韻確認問題	別紙152添付
119	371	二次元コード		自社ページURL	参考資料：『源氏物語』桐壺の巻	別紙153添付
120	374	二次元コード		自社ページURL	「老子」 基本句形の確認	別紙154添付
121	376	二次元コード		自社ページURL	「莊子」 基本句形の確認	別紙155添付
122	378	二次元コード		自社ページURL	「韓非子」 基本句形の確認	別紙156添付
123	382	二次元コード		自社ページURL	「管鮑之交」 基本句形の確認	別紙157添付
124	386	二次元コード		自社ページURL	「壯士一たび去りて復た還らず」 基本句形の確認	別紙158添付
				自社ページURL	「凶窮まりてヒ首見はる」 基本句形の確認	別紙159添付
125	428(3)	二次元コード	サントリーホールディングス	https://www.suntory.co.jp/eco/birds/encyclopedia/	参考リンク：日本の鳥百科	

申請図書			学習上の参考に供する情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	
126	428(3)	二次元コード		自社ページURL	参考動画：虫の鳴き声	別紙160添付
127	432(7)	二次元コード		自社ページURL	参考動画：雅楽で使用する楽器	別紙161添付
128	434(9)	二次元コード	風俗博物館	https://costume.iz2.or.jp/	参考リンク：日本服飾史	
129	446(21)	二次元コード	立命館大学アート・リサーチセンター／京都市平安京創生館	https://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/heian/	参考リンク：平安京オーバーレイマップ	

古文編

漢文編

巻末図録・地図

107-221 (書名入る) / 古文編

著作権について

第 I 部

第 II 部

別紙 2

1問 / 6問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
下る

別紙 3

1問 / 10問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
いかで

別紙 4

1問 / 10問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
もの言ふ

別紙 5

1問 / 7問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
よろづ

1問 / 14問

次の古語の意味を答えよう。
あいなし

解答を見る

1問 / 8問

次の古語の意味を答えよう。
ものあはれ

解答を見る

1問 / 9問

次の古語の意味を答えよう。
いにしへ

解答を見る

1問 / 9問

次の古語の意味を答えよう。
うたかた

解答を見る

1問 / 10問

次の古語の意味を答えよう。
春秋

解答を見る

日野山の閑居

わが身、父方の祖母の家を伝へて久しくかの所に住む。その後、縁欠けて身衰へ、偲ぶ方々しげかりしかど、つひに跡とむることを得ず、三十余りにして、さらにわが心と一つの庵を結ぶ。これをありし住まひに並ぶるに、十分が一なり。居屋ばかりを構へて、はかばかしく屋を作るに及ばず。わづかに築地を築けりといへども、門を建つたつきなし。竹を柱として車を宿せり。雪降り、風吹くごとに、あやふからずしもあらず。所、河原近ければ、水の難も深く、白波のおそれも騒がし。

すべて、あられぬ世を念じ過ぐしつつ、心を悩ませること三十余年なり。その間、折々の違ひめ、おのづから短かき運を悟りぬ。すなはち、五十の春を迎へて、家を出で世を背けり。もとより妻子なければ捨てがたきよすがもなし。身に官禄あらず、何につけてか執をとどめん。むなしく大原山の雲に臥して、また五返りの春秋をなん経にける。

ここに六十の露消えがたに及びて、さらに末葉の宿りを結べることあり。いはば、旅人の一夜の宿を作り、老いたる蚕の繭を営むがごとし。これを中ごろの住みかに並ぶれば、また百分が一に及ばず。とかくいふほどに、よはひは歳々に高く、住みかは折々に狭し。その家のありさま世の常にも似ず。広さはわづかに方丈、高さは七尺が内なり。所を思ひ定めざるがゆゑに地を占めて作らず。土居を組み、うちおほひを葺きて、継ぎ目ごとにかげがねを掛けたり。もし心になはぬことあらば、やすくほかへ移さんがためなり。その改め作ること、いくばくのわづらひかある。積むところわづかに二両、車の力を報ふほかには、さらにはかの用途いらす。

今、日野山の奥に跡を隠してのち、東に三尺余の庇をさして、柴折りくぶるよすがとす。南、竹の簀子を敷き、その西に閑伽棚を作り、北に寄せて障子を隔てて阿弥陀の絵像を安置し、そばに普賢を描き、前に法花経を置けり。東のきはに蕨のほども敷きて、夜の床とす。西南に竹のつり棚を構へて、黒き皮籠三合を置けり。すなはち、和歌・管弦・往生要集ごときの抄物を入れたり。かたはらに琴・琵琶のおの一張を立つ。いはゆる折琴・継琵琶これなり。仮の庵のありやう、かくのごとし。

その所のさまを言はば、南に懸け樋あり。岩を立てて、水をためたり。林の木近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。まさきのかつら、跡埋めり。谷しげけれど、西晴れたり。観念の頼り、なきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲のごとくして西方にはほふ。夏はほととぎすを聞く。語らふごとに死出の山路を契る。秋はひぐらしの声、耳に満てり。うつせみの世をかなしむほど聞こゆ。冬は雪をあはれぶ。積もり消ゆるさま、罪障にたとへつべし。

方丈記

鴨長明

結び

そもそも一期いちじの月影かたぶきて、余算、山の端はに近し。たちまちに三途さんづの闇に向かはんとす。何のわざをかかこたんとする。仏の教へ給ふおもむきは、ことに触れて執心なかれとなり。今、草庵を愛するもとがとす。閑寂かんせきに著しやくするもさはりなるべし。いかが要なき楽しみを述べて、あたら時を過ぐさん。

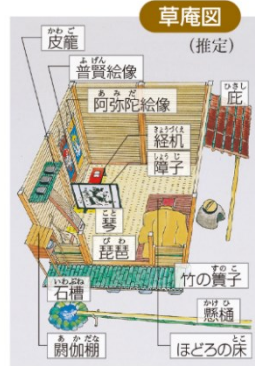
静かなる暁、このことわりを思ひ続けて、みづから心に問ひていはく、世を逃れて山林にまじはるは、心を修めて道を行はんとなり。しかるを、なんじ姿は聖人ひじりにて、心は濁りに染しめり。住みかはすなはち浄名居士じやうみやうこじの跡をけがせりといへども、保つところはわづかに周利槃特しゆりはんどくが行ひにだに及ばず。もしこれ貧賤ひんせんの報ひのみづから悩ますか、はたまた妄心のいたりて狂きやうせるか。そのとき心さらに答ふることなし。ただ、かたはらに舌根をやとひて、不請の阿弥陀仏あみだぶつ、両三遍申してやみぬ。

時に、建暦の二年ふたとせ、弥生のつごもりごろ、桑門さうもんの蓮胤れんいん、外山やまの庵いほりにして、これを記す。

方丈記

別紙 13

参考資料：草庵図（推定）



別紙 14

1問 / 13問

解答を見る

領る
次の古語の意味を答えよう。

別紙 15

1問 / 8問

解答を見る

又々
次の古語の意味を答えよう。

別紙 16

1問 / 9問

例の
次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

別紙 17

1問 / 10問

憂し
次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

別紙 18

1問 / 15問

つごもり
次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

別紙 19

1問 / 6問

すなまじ
次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

別紙 20

1問 / 10問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
心苦しげなり

別紙 21

1問 / 15問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
いたし

別紙 22

1問 / 9問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
物語

別紙 23

1問 / 17問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
やむことなし

1問 / 14問

次の古語の意味を答えよう。
かたち

解答を見る

1問 / 22問

次の古語の意味を答えよう。
つれづれなり

解答を見る

「光る君の誕生」本文（続き）

あまたの御方々を過ぎさせ給ひて、ひまなき御前渡りに、人の御心を尽くし給ふも、げにことわりと見えたり。まう上り給ふにも、あまりうちしきる折々は、打橋・渡殿のここかしこの道に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾、たへがたくまさなきこともあり。またあるときには、えさらぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかなた心を合はせて、はしたなめわづらはせ給ふときも多かり。ことにふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いとう思ひわびたるを、いとどあはれと御覧じて、後涼殿にもとより候ひ給ふ更衣の曹司をほかに移させ給ひて、上局に給はず。その恨み、ましてやらむ方なし。

この皇子三つになり給ふ年、御袴着のこと、一の宮の奉りしに劣らず、内蔵寮・納殿の物を尽くして、いみじうせさせ給ふ。それにつけても、世のそしりのみ多かれど、この皇子のおよすけもおはする御かたち・心ばへ、ありがたくめづらしきまで見え給ふを、えそねみあへ給はず。ものの心知り給ふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目を驚かし給ふ。

その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとし給ふを、いとまさらに許させ給はず。年ごろ、常のあつしきになり給へれば、御目慣れて、「なほしばし試みよう。」とのみのたまはするに、日々に重り給ひて、ただ五、六日のほどに、いと弱うなれば、母君泣く泣く奏して、まかでさせ奉り給ふ。かかる折にも、あるまじき恥もこそと、心づかひして、皇子をばとどめ奉りて、忍びてぞ出で給ふ。

限りあれば、さのみもえとどめさせ給はず、御覧じだに送らぬおぼつかなさや、言ふ方なく思ほさる。いとにほひやかに、うつくしげなる人の、いたう面痩せて、いとあはれともの思ひしみながら、言に出でも聞こえやらす、あるかなきかに消え入りつつものし給ふを御覧するに、来し方行く末おぼしめされず、よろづのことを、泣く泣く契りのたまはずれど、御いらへもえ聞こえ給はず、まみなどいまとたゆげにて、いとどなよなよと、我かのけしきにて臥したれば、いかさまにとおぼしめし惑はる。輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせ給ひて、さらにえ許させ給はず。「限りあらむ道にも、おくれ先立たじと契らせ給ひけるを。さりとともうち捨ててはえ行きやらじ。」とのたまはするを、女もいといみじと見奉りて、

「限りとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

いとかく思ひ給へましかば。」と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覧じ果てむとおぼしめすに、「今日始むべき祈りども、さるべき人々承れる、今宵より。」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながら、まかでさせ給ふ。

御胸のみつとふたがりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせ給ふ。御使ひの行き交ふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせつるを、「夜半うち過ぐるほどになむ、絶え果て給ひぬる。」とて泣き騒げば、御使ひも、いとあへなくて帰り参りぬ。聞こしめす御心惑ひ、何事もおぼしめし分かれず、籠りおはします。

(桐壺)

1問 / 11問

次の古語の意味を答えよう。
こよなし

解答を見る

1問 / 16問

次の古語の意味を答えよう。
あさまし

解答を見る

1問 / 17問

次の古語の意味を答えよう。
猛し

解答を見る

1問 / 7問

次の古語の意味を答えよう。
あそばす

解答を見る

別紙 31

1問 / 14問

次の古語の意味を答えよう。
おぼほる

解答を見る

別紙 32

1問 / 13問

次の古語の意味を答えよう。
あやし

解答を見る

別紙 33

1問 / 12問

次の古語の意味を答えよう。
あやし

解答を見る

別紙 34

1問 / 12問

次の古語の意味を答えよう。
心もとなし

解答を見る

別紙 35

1問 / 11問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
わりなし

別紙 37

1問 / 12問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
あはれなり

別紙 36

1問 / 9問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
まねが

別紙 38

1問 / 10問

解答を見る

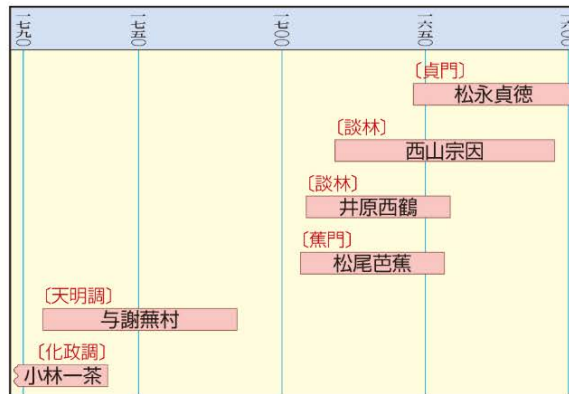
次の古語の意味を答えよう。
な...そ

参考資料：近世俳風の比較

化政調 <small>（小林一茶）</small>	天明調 <small>（与謝蕪村）</small>	蕉風 <small>（松尾芭蕉）</small>	談林 <small>（西山宗因）</small>	貞門 <small>（松永貞徳）</small>	呼称・代 表俳人 時期
文化～文政(1804～1830)	天明(1781～1789)	元禄(1688～1704)	延宝～貞享(1673～1688)	寛永～寛文(1624～1673)	活動
月並調の俳諧が大勢を占める中、生活に根ざした、人間味あふれる句を作った。	俗化した俳諧を革新する、蕉風復帰の運動。南宋の画論から離俗論を唱えた。	放埒になつた俳諧を革新し、風雅・閑寂な境地を開いた。俳諧を芸術に高めた。	俳諧を庶民に開放した。	貞門俳諧のマンネリ化に對抗し、方式を自由にして、俳諧を庶民に開放した。	俳風
主観的・現実的。俗語や方言を使い生活感情を率直に詠む。 ●名月を取つてくれろと泣く子かな	浪漫的・叙情的。古典などに材料を求める。絵画的で印象鮮明な作風。 ●牡丹散つてうち重なりぬ二三片	わび・さび・しをり・ほそみ。平易な表現で人生の深遠を象徴的に詠む。 ●この道や行く人なしに秋の暮れ	●やがて見よ樺くらはせん蕎麦の花	軽妙洒脱。斬新で奇抜な趣向を求める。破格表現が多い。 ●ねぶらせて養ひたてよ花のあめ	

◆近世俳風の比較

参考資料：主要俳人活動時期一覧



別紙 41

1問 / 4問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
あやなし

別紙 42

1問 / 3問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
にほふ

別紙 43

1問 / 3問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
忍び

別紙 44

1問 / 3問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
見す

別紙 45

1問 / 10問

悩み 次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

別紙 46

1問 / 4問

受領 次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

別紙 47

1問 / 15問

いみじ 次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

別紙 48

1問 / 3問

まはゆし 次の古語の意味を答えよう。

解答を見る

1問 / 5問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
念ず

1問 / 8問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
いかに

1問 / 4問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
物語

1問 / 3問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
おもしろし

1問 / 12問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
あさまし

1問 / 14問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
恕ず

1問 / 6問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
あてなり

1問 / 9問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
限り

1問 / 10問

解答を見る

次
の
古
語
の
意
味
を
答
え
よ
う
。
参
照
す

1問 / 10問

解答を見る

次
の
古
語
の
意
味
を
答
え
よ
う
。
こ
と
な
り

1問 / 4問

解答を見る

次
の
古
語
の
意
味
を
答
え
よ
う
。
渡
御
す

1問 / 18問

解答を見る

次
の
古
語
の
意
味
を
答
え
よ
う
。
ひ
ま

1問 / 12問

次の古語の意味を答えよう。
たゆむ

解答を見る

1問 / 15問

次の古語の意味を答えよう。
まがふ

解答を見る

1問 / 18問

次の古語の意味を答えよう。
かしづく

解答を見る

1問 / 9問

次の古語の意味を答えよう。
あだあだし

解答を見る

別紙 65

1問 / 14問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
しどげなし

別紙 66

1問 / 15問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
露けし

別紙 67

1問 / 6問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
ゆかし

別紙 68

1問 / 14問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
物忌み

別紙 69

1問 / 6問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
ありがとう

別紙 70

1問 / 5問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
めでたし

別紙 71

1問 / 5問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
うたて

別紙 72

1問 / 6問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
やむことなし

1問 / 6問

解答を見る

夕暮る
次の古語の意味を答えよう。

1問 / 8問

解答を見る

才
次の古語の意味を答えよう。

1問 / 6問

解答を見る

やがて
次の古語の意味を答えよう。

大鏡

雷神となった道真

また、北野の、神にならせ給ひて、いと恐ろしく雷鳴りひらめき、清涼殿に落ちかかりぬと見えけるが、本院の大臣、太刀を抜きさけて、「生きてもわが次にこそものし給ひしか。今日、神となり給へりとも、この世には、我にところ置き給ふべし。いかでかさらではあるべきぞ。」と、にらみやりてのたまひける。一度はしづませ給へりけりとぞ、世人申し侍りし。されど、それは、かの大臣のいみじうおはするにはあらず、王威の限りなくおはしますによりて、理非を示させ給へるなり。

(左大臣時平)

大鏡

内裏の裏板

また、雨の降る日、うちながめ給ひて、

あめの下乾けるほどのなければや着てし濡れ衣干るよしもなき

やがてかしこにて失せ給へる、夜のうちに、この北野にそこの松を生ほし給ひて、渡り住み給ふをこそは、ただ今の北野宮と申して、現人神におはしますれば、おほやけも行幸せしめ給ふ。いとかしこく崇め奉り給ふめり。筑紫のおはしまし所は安楽寺といひて、おほやけより別当・所司などなさせ給ひて、いとやむごとなし。

内裏焼けてたびたび造らせ給ふに、円融院の御時のことなり、工ども、裏板どもをいとうるはしく鉤かきてまかり出でつつ、またの朝に参りて見るに、昨日の裏板に、ものすすけて見ゆる所のありければ、梯に上りて見るに、夜のうちに虫の食めるなりけり。その文字は、

造るともまたも焼けなむ菅原やむねのいたまの合はぬ限りは

とこそありけれ。それもこの北野のあそばしたるとこそは申すめりしか。

(左大臣時平)

1問 / 10問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
やすし

1問 / 9問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
いますかり

1問 / 6問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
手書き

1問 / 7問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
ひととせ

1問 / 8問

次の古語の意味を答えよう。
ちゅうむじし

解答を見る

別紙 84

1問 / 7問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
さのみに

別紙 85

1問 / 2問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
発句

別紙 86

1問 / 4問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
冠

別紙 87

1問 / 3問

解答を見る

次の古語の意味を答えよう。
振る

1問 / 7問

解答を見る

風雅
次の古語の意味を答えよ。

1問 / 3問

解答を見る

とかく
次の古語の意味を答えよ。

1問 / 7問

解答を見る

わざ
次の古語の意味を答えよ。

科擧
 科擧とは、隋から清末に至るまで千三百年以上にわたって実施された、高級官僚の登用試験制度である。当初、進士・明經などの科目に分かれて選擧（人材任用）していたため「科擧」という。

儒家の理念においては、儒家思想を身につけた「君子」が民の上に立って政治を行うべきとされたため、それにふさわしい人材を選ぶ試験で、主に経学（儒教の経書の知識）・詩文（文学）・論策（政治論文）の三分の分野が出題された。

第一段階の試験である解試の合格率が1%を下回ることもある狭き門であったが、儒教社会においては、知識人である限り科擧を受験するのは当然とされ、ほぼ全員が科擧合格を目ざしたのである。

唐代の後半以降、僧侶などを除いたほぼすべての知識人ととって、科擧の合格は前半生の最大の目標であった。そのため科擧は、さまざまなジャンルの文章に影響を与えた。

例文「九月九日憶山東兄弟」詩：科擧受験の準備のため、都長安を一人で訪れた王維が、九月九日の重陽の節句の日に故郷の家族への思いをよんだ詩。

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよう。

未^スク^ク
 欲^シニ^シ改^メシ^テ推^ス作^ラシ^テ敵^ニ引^キ手^ヲ作^ス推^シ敵^ノ之^ノ勢^ヲ未^ク決^ス

（例文）

解答を見る

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよう。

若^シク^ク則^チ
 若^シ人^ニ有^ラニ^シ嬰^{フル}之^者則^チ必^ズ殺^ス人^ヲ

（例文）

解答を見る

1問 / 3問

次の句形の読みと意味を答えよう。

則^チ
 擊^ツ其^首則^チ尾^至

（例文）

解答を見る

1問 / 3問

次の句形の読みと意味を答えよう。

A 哉 乎、 B ヤ

〈例文〉

善^キ哉 乎、 鼓^{ニスルヤ}琴^ヲ。

解答を見る

友情に関する故事



○忘年の交わり

【書き下し文】

1 禰衡と、2 孔融と、3 爾汝の交はりを作す。時に衡は未だ二十に満たず、融は已に五十なるも、衡の才の秀なるを重んじ、年を忘るるなり。

(張隱『文士伝』)

【口語訳】

禰衡と孔融とは、お互いを「おまえ」と呼び合う仲だった。その時に禰衡はまだ二十歳になっておらず、孔融はすでに五十歳だったが、禰衡が優秀なので敬意を払い、年齢のことは忘れていたのである。

※実際の生年から見ると、年齢差は二十歳なので、『文士伝』の年齢表記には誤りがあると思われる。

1 禰衡 一七三―一九八。後漢末の文人。字は正平。

2 孔融 一五三―二〇八。後漢末の文人。字は文學。建安七子の一人。

3 爾汝の交はり 「爾」「汝」ともに「なんじ」と読み、慣れ親しんだ者を呼ぶときに使う言葉。これも親しい友情関係を表す成語。

友情に関する故事

○金石の交わり

1 漢王（劉邦）の命令を受けた²韓信が³楚の項羽を攻めに来たとき、項羽は⁴武渉を遣わして韓信を味方に付けようとした。武渉は次のように言って韓信を説得した。

【書き下し文】

「足下何ぞ漢に反きて楚に与せざる。楚王は足下と旧故有り。且つ漢王は必ずすべからず。身 項王の掌握の中に居ること数なり。然れども脱するを得れば、約に背き、復た項王を撃つ。其の親信すべからざること此のごとし。今 足下自ら以為へらく漢王と金石の交わりを為すと雖も、然れども終に漢王の禽とする所と為らん。足下の須臾にして今に至るを得し所以の者は、項王の在るを以つてなり。項王即し亡せば、次は足下を取らん。何ぞ楚と連和し、天下を三分して⁵齊に王たらざる。今此の時を積て、自ら漢王に必して以つて楚を撃つは、且し智者たれば固より此のごとくせんや。」

（『漢書』韓信伝）

【口語訳】

「あなたはどうして漢に背き楚に味方しないのですか。楚王はあなたと旧交があります。そのうえ漢王は信用できません。（漢王の）身は何度も項王の手に握られましたが、危機を脱することができたら、約束に背き、また項王を攻撃しました。その信用できないのはこのようです。今あなたは自分で漢王と金石のように堅い交わりを結んでいるとお思いでしょうが、しかし結局は漢王に虜にされるでしょう。あなたが今まで生き延びてこられたのは、項王がいたからです。もし項王が亡くなったら、次はあなたが捕まるでしょう。どうして楚と連携して、天下を三分して齊に王となれないのですか。今この時を逃して、自ら漢王を信じて楚を攻撃するというようなことは、智者ならば当然いたしません。」

1 漢王（劉邦） 前二五六―前一九五。のちの漢の高祖。鴻門の会のあと、項羽によって漢王とされた。

2 韓信 ？―前一九六。漢の將軍。劉邦が天下を取るのを助けた。蕭何・張良とともに「三傑」の一人。

3 楚の項羽 前二三二―前二〇二。名は籍。楚（春秋・戦国時代に長江中流域を領有した国）の將軍の家の出身で、鴻門の会のあと、西楚の霸王と号した。

4 武渉 生没年未詳。項羽の部下。

5 齊 春秋・戦国時代の齊の国が領有した地方。今の山東省一帯。これ以前に、韓信は齊を平定し、劉邦から齊王とされていた。



友情に関する故事

○金蘭の交わり

【書き下し文】

子曰はく、「君子の道は、或いは出で或いは処り、或いは黙し或いは語る。二人 心を同じくすれば、其の利きこと金を断つ。同心の言は、其の臭ひ蘭のごとし。」と。

(『易経』繫辭伝上)

【口語訳】

先生（孔子）が言われた、「君子の道は、出仕する人がいたり民間におる人がいたり、沈黙する人がいたり大いに論ずる人がいたりするものである。この二人が心を一つにすれば、その鋭利さは金属をも断ち切るほどである。心を一つにした者の言葉は、その香りが蘭のように芳しい。」と。



友情に関する故事

○膠漆の交わり

1 秦の昭王に仕えていた²范雎に対して、³蔡沢が王の様子を尋ねた。

【書き下し文】

蔡沢曰はく、「然らば則ち君の主の慈仁にして忠に任じ、旧故に悼厚にして、其の智を賢として、有道の士と⁴膠漆を為し、義として功臣に倍かざるは、⁵秦の孝公・楚の悼王・越王に孰与れぞや。」と。

(『史記』蔡沢列伝)

【口語訳】

蔡沢が言った、「それでは、あなたの主君は慈しみと仁愛にあふれ、忠臣を信任し、古からのつき合いを大事にされて、智者を大切に、徳ある人物と膠や漆で固めたような交わりを結び、信義を重んじて功績のある臣下を裏切らないという点において、秦の孝公・楚の悼王・越王と比べてどうでしょうか。」と。

- 1 秦の昭王 前三〇六―前二五一在位。
- 2 范雎 ?―前二五五。戦国時代の遊説家。
- 3 蔡沢 生没年未詳。戦国時代の遊説家。
- 4 膠漆 膠と漆は、どちらも接着剤として使われた。
- 5 秦の孝公・楚の悼王・越王 いずれも臣下の意見をよく聞いたと言われる君主。越王は越王句踐のこと。



友情に関する故事

○莫逆の友

【書き下し文】

子祀・子輿・子犁・子来の四人、相与に語りて曰はく、「孰か能く無を以つて首と為し、生を以つて脊と為し、死を以つて尻と為さん。孰か死生存亡の一体なるを知る者ぞ。吾之と友たらん。」と。四人相視て笑ひ、心に逆らふ莫し。遂に相与に友と為る。

.....

子桑戸・孟子反・子琴張の三人、相与に友たらんとして曰はく、「孰か能く相与する無きに相与し、相為す無きに相為さん。孰か能く天に登り霧に遊び、無極に撓挑し、相忘るるに生を以つてし、終窮する所無からん。」と。三人相視て笑ひ、心に逆らふ莫し。遂に相与に友たり。

(『莊子』 大宗師編)

【口語訳】

子祀・子輿・子犁・子来の四人が、いっしょに語り合つて言った、「誰か無を頭にし、生を背骨にし、死を尻にできる者はいないかなあ。誰か死生存亡が一体のものだと知っている者はいないかなあ。私はそういう人と友人でいたい。」と。四人は顔を見合わせて笑いながら、心を通わせ、そのまま友人になった。

.....

子桑戸・孟子反・子琴張の三人が、お互いに交わりを結ぼうとして言った、「誰か協力し合うことなしに協力し、いっしょに行動しようとしなくていっしょに行動することのできる者はいないかなあ。誰か天に登って霧の中で遊び、無限の空間を動き回り、生を忘れて、極まるどころがない世界に住むことのできる者はいないかなあ。」と。三人は顔を見合わせて笑いながら、心を通わせ、そのまま友人になった。



友情に関する故事

○忘形の友

【原文・書き下し文】

唐・白居易「陶潜の体にならふ詩十六首」其の七（第五〜八句）

我有同心人 我に同心の人有り

邈邈崔与銭 邈邈たり¹ 崔と銭と我有忘形友 我に² 忘形の友有り迢迢李与元 迢迢たり³ 李と元と

【口語訳】

私には心を一つにする人がいる

遠く離れて暮らす崔君と銭君だ

私には地位など関係ない友がいる

遙か遠くに隔たって住む李君と元君だ

1 崔・銭 崔群（一説に崔玄亮）と銭徽。

2 忘形 顔かたちや身なり、地位、身分などを気にしないこと。『莊子』讓王編の「養志者忘形」（志を養ふ者は形を忘る）に基づく言葉。

3 李・元 李紳（一説に李建、あるいは李固言）と元稹。



1問 / 9問

次の句形の読みと意味を答えよう。

不_レ常_ト (ト)

〈例文〉
而_レ伯_ト樂_ハ不_レ常_ト有_ラ

解答を見る

1問 / 4問

次の句形の読みと意味を答えよう。

不_レ敢_テ (ト)

〈例文〉
益_ニ習_{ナレ}其_キ声_ニ又_レ近_ク出_ド前_ト後_ニ終_ツ不_レ敢_テ搏_ツ

解答を見る

1問 / 4問

次の句形の読みと意味を答えよう。

但_ダ (ト) 爾

〈例文〉
但_ダ手_ノ熟_{セル}爾

解答を見る

『莊子』養生主編

【書き下し文】

庖丁 文惠君の為に牛を解く。手の触る所、肩の倚る所、足の履む所、膝の踏つ所、翫然たり嚮然たり、刀を奏むること驕然たり。音に中たらざる莫く、桑林の舞に合ひ、乃ち經首の会に中たる。

文惠君曰はく、「謔、善いかな。技蓋し此に至るか。」と。庖丁 刀を積てて対へて曰はく、「臣の好む所の者は道なり。技よりも進る。始め臣の牛を解くの時、見る所に非ざる者無し。三年の後、未だ嘗て全牛を見ざるなり。方今の時、臣 神を以つて遇ひて、目を以つて視ず。官知は止みて神欲行はる。天理に依りて、大卻を批ち大窾に導ひ、其の固然に因る。枝径肯綮にも未だ嘗みず。而るを況んや大軋をや。良庖は歳ごとに刀を更へて割し、族庖は月ごとに刀を更へて折る。今臣の刀は十九年、解く所は数千牛なり。而るに刀刃は新たに硎より発せるがごとし。彼の節なる者には間有りて、刀刃なる者には厚み無し。厚み无きものを以つて間有るところに入るれば、恢恢乎として其の刃を遊ばすに於いて必ず余地あり。是を以つて十九年にして刀刃新たに硎より発せるがごとし。然りと雖も族に至る毎に、吾其の為し難きを見、怵然として為に戒め、視ること為に止まり、行むこと為に遅く、刀を動かすこと甚だ微なり。諫然として已に解くれば、土の地に委つるがごとし。刀を掲げて立ち、之が為に四顧し、之が為に躊躇して志を満たし、刀を善ひて之を蔵む。」と。

文惠君曰はく、「善いかな。吾 庖丁の言を聞きて、養生を得たり。」と。

【口語訳】

庖丁が文惠君のために牛を料理した。手で触り、肩を寄せ、足をふんばり、膝立てをする彼の動きのたびに、さくさくぱりぱりと音がたち、牛刀の動きにつれてざくざくと響きわたる。それがみな音律にかなって快く、(殷の湯王のときの名曲である)桑林の舞楽にも調和して、また(堯のときの名曲である)經首の音節にもかなっていた。

文惠君は(すっかり感嘆して)、「ああ、見事なものだなあ。技もなんとここまで至るものか。」と言った。庖丁は牛刀を手から離すと答えて言った、「私の求めておりますものは道でございまして、手先の技以上のものです。私をはじめて牛の料理をいたしましたところは、目に見えるものは牛ばかり(、手のつけどころもわかりません)でしたが、三年たってからは、もう牛の全体は目につかなくなりました。このごろでは、私は精神で牛に対していて、目で見ていたのではありません。感覚器官に基づく知覚はたらきをやめて、精神の自然な活動だけがはたらいているのです。天理(自然な本来の筋道)に従って、(牛の皮と肉、肉と骨の間の)大きな隙間に刀刃をふるい、大きな空洞



に沿って走らせて、牛の体の本来のしくみにそのまま従ってゆきます。支脈と経脈が入り組み、肉と骨とがかたまつたような微妙なところでさえ、試し切りをするようなことはありません。まして大きな骨のかたまりならなおさらです。腕のよい料理人は一年ぐらいで刃こぼれして牛刀を取り替えているのですが、たいていの料理人は一月ごとに（骨につき当てて）牛刀を折ってしまい、取り替えています。ところで、私の牛刀は十九年も使っていて、数千頭もの牛を料理してきましたが、その刃先はまるでたつた今砥石^いで仕上げたばかりのようです。あの関節というものには隙間があり、牛刀の刃先というものにはほとんど厚みがありません。その厚みのないものを隙間のあるところに入れていくのですから、まことに広々としたもので、刃先を動かすにも必ずゆとりがあります。だからこそ、十九年も使っているのに、牛刀の刃先がまるでたつた今砥石で仕上げたばかりのようなのです。ただそうではあっても、筋や骨の集まったところにくるたびに、私はその仕事の難しさを見て、心をひきしめて緊張し、そのために視線は一点に集中し、手の動きも遅くして、牛刀の動かし方はきわめて微妙にいたします。やがてばさりと音がして肉が離れてしまうと、まるで土が地面に落ちたよう（に、切り離れた形跡が残っていないの）です。牛刀を手にはひっさげて立ち上がり、四方を見回してしばらく去りがたくたたずんだうえで心中に満足し、牛刀をぬぐってそれを鞆^{たもと}に収めるのです。」と。

文惠君は言った、「すばらしいことだ。わしは庖丁の言葉を聞いて、養生（という真の生き方）の道を会得した。」と。

『莊子』天道編

【書き下し文】

世の道に貴ぶ所の者は、書なり。書は語に過ぎず。語には貴きもの有り、語の貴ぶ所の者は、意なり。意には随ふ所有り、意の随ふ所の者は、言を以つて伝ふべからざるなり。而るに世は言を貴ぶに因りて書を伝ふ。世は之を貴ぶと雖も、猶ほ貴ぶに足らざるなり。其の貴ぶは其の貴ぶべきに非ざるが為なり。

………

桓公 書を堂上に読む。輪扁 輪を堂下に斲る。椎鑿を積てて上り、桓公に問ひて曰はく、「敢へて問ふ、公の読む所は何の言と為すや。」と。公曰はく、「聖人の言なり。」と。曰はく、「聖人在りや。」と。公曰はく、「已に死せり。」と。曰はく、「然らば則ち君の読む所の者は、古人の糟魄のみ。」と。桓公曰はく、「寡人 書を読むに、輸入安くんぞ議するを得んや。説有らば則ち可なるも、説无くんば則ち死せん。」と。輪扁曰はく、「臣や、臣の事を以つて之を觀る。輪を斲るに、徐ならば則ち甘くして固からず、疾ならば則ち苦にして入らず。徐ならず疾ならざるは、之を手にて得心に應じ、口 言ふこと能はざるも、数の其の間に存する有り。臣は以つて臣の子に諭すこと能はず、臣の子も亦之を臣より受くること能はず。是を以つて行年七十にして老いて輪を斲る。古の人と其の伝ふべからざるものと、死せり。然らば則ち君の読む所の者は、古人の糟魄のみ。」と。

【口語訳】

世間で道を求めるために尊重するものは、書物である。しかし、書物は言葉を連ねたものにすぎない。言葉には大切なものがあって、言葉の大切なものは、その意味内容である。意味内容にはそれが基づいて生まれてきたところがあって、意味内容の基づいたところは、言葉では伝えられないものである。ところが、世間では言葉を尊重することから、書物を（尊重して）伝えている。世間ではいくら尊重していても、それは尊重するに値しないものだ。彼らの尊重しているものは、本当の尊重すべきものではないからである。

………



齊の桓公（あるとき）堂の上で書物を読んでいた。堂の下では輪扁が（木を削って）車の輪を作っていたが、その椎と鑿を置いて堂に上ってゆき、桓公に問いかけた、「お尋ねしますが、あなたさまのお読みなのは、どのような言葉ですか。」と。桓公は答えた、「聖人の言葉だ。」と。（輪扁はまた）尋ねた、「聖人は生きていますか。」と。桓公は「もう死んでしまわれた。」と答えた。（すると輪扁は）言った、「それならあなたさまの読まれているのは、古人の残りかすにすぎませんね。」と。桓公は（むっとして）言った、「わしが書物を読んでいるのに、どうして車職人が意見を言っただろうか、いや、よくない。弁明ができればよいが、できなければ死罪だ。」と。輪扁は答えた、「私は、自分の仕事の経験に照らして考えているのです。車の輪を作るのに、削り方が甘いと（削った穴に輻を差し込むのに）緩くて締まりが悪く、削り方がきつくと窮屈でうまくはめ込めません。甘くもなく、きつくもないという程よさは、手かげんで会得して心にうなずくだけで、口では説明することはできませんが、そこに決まった一つのこつがあるのです。私はそれを自分の子供に教えることができず、私の子供もまたそれを私から受け継ぐことができません。そのために、七十のこの年になって老いてしまっても車の輪を作っているのです。昔の人も、そうした人に伝えられないものといっしょに滅んでいきました。してみると、あなたさまが読まれているのは、古人の残りかすにすぎないということです。」と。

別紙 111

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよう。

令_ム A_ツ B_レ

吾_{われ} 令_ム 人_ツ 望_マ 其_ス 氣_ツ 皆_カ 為_レ 竜_ツ 虎_ツ 成_ス 五_ツ 采_ツ

〈例文〉

解答を見る

別紙 112

1問 / 4問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何_ツ 以_テ 何_ツ 以_テ 至_ル 此_ニ

不_レ 然_シ 籍_ツ 何_ツ 以_テ 至_ル 此_ニ

〈例文〉

解答を見る

別紙 113

1問 / 3問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何_レ 如_ク

今日_ノ 之_ノ 事_何 如_ク

〈例文〉

解答を見る

別紙 114

1問 / 5問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何_レ 奈_何

為_レ 之_ノ 奈_何

〈例文〉

解答を見る

1問 / 4問

次の句形の読みと意味を答えよう。
（ヌル）か
乎

〈例文〉

漢 皆 已 得 楚 乎。

解答を見る

1問 / 6問

次の句形の読みと意味を答えよう。
独
（ツミ）

〈例文〉

今 独 臣 有 船。

解答を見る

劉邦の人物像

① 劉邦の人物

【書き下し文】

高祖 人と為り隆準にして竜顔、須髯美しく、左股に七十二の黒子有り。仁にして人を愛し、施しを喜び、意豁如たり。常に大度有り。

【口語訳】

高祖の人となりは、鼻が高くて竜のような顔つき（眉の骨が高く盛り上がった顔）で、ひげが美しく、左のにも七十二のほくろがあった。思いやりが深くて人をいつくしみ、施しを好み、心が広く細かいことにこだわらなかつた。常に度量が大きかつた。

② 儒者に面会したときの態度

【書き下し文】

西のかた¹高陽を過ぐ。²酈食其監門に詣ひて曰はく、「諸將の此を過ぐる者多し。吾、沛公を視るに、大人長者なり。」と。乃ち見えて沛公に説かんことを求む。沛公方に牀に踞し、両女子をして足を洗はしむ。酈生 拝せず、長揖して曰はく、「足下必ず無道の秦を誅せんと欲せば、宜しく踞して長者を見るべからず。」と。是に於いて沛公起ち、衣を撰りて之に謝し、上坐に延ぐ。

【口語訳】

〔沛公は〕西方の高陽を通過した。酈食其が町の門番に言った、「ここを通過する將軍は数多いが、わしが見たところ、沛公は立派な人物だね。」そして沛公に自分の考えを説くために面会を申し入れた。沛公はちょうど、椅子に腰かけ、足を投げだして、二人の女に足を洗わせているところであった。酈生（酈食其）はひざまずく拝礼をせず、ただ両手を前で組む敬礼をして言った、「あなたがどうしても無道の秦を討とうとなさるなら、椅子にかけたまままで徳ある人物に会うという無礼はしないほうがよろしい。」そこで沛公は立ちあがり、衣服の乱れを直して謝り、「酈食其を」上座へと案内した。

1 高陽 今の河南省杞県の南西。

2 酈食其 ? — 前二〇三。秦末漢初の儒者で遊説家。のちに劉邦に仕える。

③ 咸陽占拠時の振る舞い

【書き下し文】





漢の元年十月、沛公の兵遂に諸侯に先んじて1覇上に至る。2秦王子嬰、素車白馬で、頸に係くるに組を以つてし、皇帝の璽符節を封じ、3軹道の旁らに降る。諸將或いは秦王を誅せよと言ふも、沛公曰はく、「始め4懐王の我を遣はすは、固より能く寛容なるを以つてなり。且つ人己に服降するに、又之を殺すは不祥なり。」と。乃ち秦王を以つて吏に属し、遂に西のかた咸陽に入る。宮に止まりて休舎せんと欲するも、5樊噲・6張良諫む。乃ち秦の重宝財物の府庫を封じ、還りて覇上に軍す。

諸侯の父老豪傑を召して曰はく、「父老 秦の苛法に苦しむこと久し。誹謗する者は族せられ、偶語する者は棄市せらる。吾 諸侯と約す、『先に関に入る者、之に王とせん。』と。吾当に関中に王たるべし。父老と約す。法は三章のみ。『人を殺す者は死し、人を傷つくるもの及び盗むものは罪に抵つ。』余は悉く秦の法を除去せん。諸の吏人 皆案堵すること故のごとくせよ。凡そ吾の来たる所以は、父老の為に害を除かんとすればなり。侵暴する所有るに非ず。恐るる無かれ。且つ吾の還りて覇上に軍する所以は、諸侯の至るを待ちて、約束を定めんとするのみ。」と。乃ち人をして秦の吏と県の郷邑を行りて之を告諭せしむ。秦人大いに喜び、争ひて牛羊酒食を持ちて、軍士に獻饗す。沛公又譲りて受けずして曰はく、「倉粟多く、乏しきに非ず。人に費やさしむるを欲せず。」と。人又益喜び、唯だ沛公の秦王と為らざらんことを恐る。

【口語訳】

漢の元年（前二〇六年）十月、沛公の軍隊は、ついに諸侯に先んじて覇上に到達した。秦王の子嬰は、白馬の引く飾りのない白木の車に乗り、首に「自殺の意思を示す」組みひもをかけ、皇帝の玉璽と割り符（命令や賞罰のしるしとするもの）を封印して、軹道のそばで降伏した。諸将のある者は秦王を誅殺せよと言ったが、沛公が言うには、「前に懐王がわたしを派遣されたのは、必ずわたしが寛容に振る舞うことができると考えられたからだ。そのうえ人がすでに降伏しているのに、なおこれを殺すのは不吉なものとだ。」と。そこで秦王を役人に委ね、そのまま西の咸陽へ入った。秦の宮殿にとどまって休息しようとしたが、樊噲と張良が諫めたので、沛公は秦の宝物・財物が入った倉庫を封印して、引き返して覇上に陣を構えた。

〔沛公は、秦の〕諸侯の長老や有力者たちを呼びよせて言った、「あなた方は、秦の苛酷な法に長い間苦しんでこられた。〔政治を〕誹謗する者は親族皆殺しにされ、向かい合って（『詩経』や『書経』のような先王の法を）語る者は死体をさらしものにされた。わたしは諸侯と、『先に関中に入った者を、その王にしよう。』と約束した。わたしは当然、関中の王となるはずだ。あなた方と約束しよう。法はただ三条だけだ。『人を殺した者は死刑に処す。人を傷つけた者と盗みをした者は、それ相当の罪に処す。』そのほかはすべて、秦の法を取り除こう。役人や人民たちは、安心して元の通りに生活せよ。そもそもわたしがやって来た理由は、あなた方のために害を取り除くためである。侵略乱暴をすることはないから、恐れることはない。また、わたしが引き返して覇上に陣を構えた理由は、諸侯の到着を待って、協定を結ぶためにすぎない。」と。そこで人を遣わして、秦の役人とともに諸侯の村里をまわってこれを告げさせた。秦の

人びとは大いに喜び、我先にと牛や羊や酒食を持参して、「沛公の」兵士に差し出して、もてなそうとした。すると沛公はまた辞退して、受け取らないで言った、「我が軍の」倉庫の穀物は多くて、不足しているわけではない。あなたたちにもものを費やさせるようなことはしたくない。」と。秦の人びとはますます喜んで、ただただ沛公が秦王になつてくれないことだけを心配した。



- 1 霸王 今の陝西省西安市の東、霸水の沿岸にあった地名。秦の都咸陽に近い。
- 2 秦王子嬰 ?―前二〇六。始皇帝の孫。
- 3 軹道 今の陝西省西安市の北東。
- 4 懷王 ?―前二〇五。戦国時代の楚王の孫。項羽らによって擁立された。
- 5 樊噲 ?―前二八九。劉邦の部下。
- 6 張良 ?―前二八六。劉邦の参謀。韓信・蕭何とともに「三傑」の一人。

④項羽と対峙したときの言動

【書き下し文】

楚・漢久しく相持して未だ決せず。丁壮は軍旅に苦しみ、老弱は輶餉に罷る。漢王・項羽相与に¹広武の間に臨みて語る。項羽 漢王と独身にて挑戦せんと欲す。漢王 項羽を数めて曰はく、「始め項羽と俱に命を懷王に受け、『先に入りて関中を定むる者、之に王とせん。』と曰ふも、項羽 約に負き、我を²蜀・漢に王とす。罪一なり。項羽 3 卿子冠軍を矯り殺し、而して自ら尊くす。罪二なり。項羽 已に趙を救ひ、当に還りて報ずべきに、擯に諸侯の兵を劫かして関に入る。罪三なり。懷王『秦に入るも暴掠する無かれ。』と約せしむるに、項羽 秦の宮室を焼き、始皇帝の冢を掘り、私かに其の財物を収む。罪四なり。又彊ひて秦の降王子嬰を殺す。罪五なり。詐りて秦の子弟を⁴新安に阮にすること二十万、⁵其の將を王とす。罪六なり。項羽 皆 諸將を善地に王として、故主を徙し逐ひ、臣下をして争ひ叛逆せしむ。罪七なり。項羽 ⁶義帝を⁷彭城より出だし逐ひて、自ら之に都し、⁸韓王の地を奪ひ、⁹梁・楚に并はせ王たりて、多く自ら予ふ。罪八なり。項羽 人をして陰かに義帝を¹⁰江南に弑せしむ。罪九なり。夫れ人臣為りて其の主を弑し、已に降れるを殺し、政を為すこと平ならず、約を主るも信ならざるは、天下の容さざる所にして、大逆無道なり。罪十なり。吾 義兵を以つて諸侯を従へて残賊を誅す。刑余の罪人をして項羽を撃殺せしめん。何を苦しみて乃ち公と挑戦せん。」と。

【口語訳】

楚・漢の両軍は長らく対峙して、まだ勝敗が決していなかった。若者は戦場で苦しむ、老人と子供は兵糧の運搬で疲れていた。漢王と項羽は、互いに広武山の付近で向き



あって話をした。項羽は漢王に単身で戦いを挑もうとしたが、漢王は項羽の罪状を並たてて責めて言った、「かつて、そなたとともに懐王さまから命を受けたとき、『先に関中に入って平定した者を、その王にしよう。』という話であったが、そなたはその約束を破ってわたしを蜀・漢の王とした。これが第一の罪だ。そなたは卿子冠軍を君主の命令と偽って殺し、かつて高位についた。これが第二の罪だ。そなたは趙を救援したとき、帰還して「懐王さまに」報告をすべきであったのに、かつてに諸侯の兵を脅迫して関中に入った。これが第三の罪だ。懐王さまが『秦に入っても乱暴や略奪はするな。』と「我々に」約束させなされたのに、そなたは秦の宮殿を焼き、始皇帝の墓を掘り、こっそりその財物を自分のものにした。これが第四の罪だ。また、降伏した秦王の子嬰を無理に殺した。これが第五の罪だ。秦の若い兵士たちをだまして新安で二十万人も生き埋めにし、その將軍を王とした。これが第六の罪だ。そなたは「自分の」諸將をすべて良い土地の王として、もとの君主たちを追いだし、その臣下たちが争って「もとの君主に」叛逆するようにさせた。これが第七の罪だ。そなたは義帝さまを彭城から追いだして自分の都にし、韓王の地を奪ったり、梁と楚を合わせてその王となったりして、多くを自分の領土とした。これが第八の罪だ。そなたは人に命じて江南で義帝さまを殺させた。これが第九の罪だ。そもそも、臣下でありながら自分の主君を殺したり、すでに降伏した者を殺したり、政治のやり方が不公平であったり、盟約の中心となりながら信義を貫かなかったりするようなのは、世の中の誰もが容認しないことであり、大逆無道の行いである。これが第十の罪だ。わたしは正義の軍隊として諸侯を従え、残忍な逆賊を討伐するのだ。「普通の者を使うのはもったいない。」前科者にそなたを殺させてやろう。どうしてわざわざ貴公に戦いを挑んだりなどするものか。」

- 1 広武 今の河南省滎陽市にある山。
- 2 蜀・漢 「蜀」は今の四川省一带。「漢」は今の陝西省南部と湖北省西北部。
- 3 卿子冠軍 「卿子」は人に対する尊称、「冠軍」は軍の総司令官の意。宋義（生没年未詳）をさす。宋義は、かつて懐王から上將軍に任命された。
- 4 新安 今の河南省新安县。
- 5 其の將 章邯（？―前二〇五）のこと。
- 6 義帝 懐王のこと。
- 7 彭城 今の江蘇省徐州市。楚の首都。
- 8 韓王 ？―前二〇六？。名は成。
- 9 梁 戦国時代の梁（魏）の国が領有した地方。今の山西省南西部・河南省北部。
- 10 江南 長江下流の南の地域。

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

只ダ　　フミ

〈例文〉

只ダ有ル敬亭山ケイテイサン

解答を見る

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何レ処ヨリ　　ス

〈例文〉

何レ処ヨリ秋風至ル

解答を見る

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何レ処ニ　　ス

〈例文〉

今夜ハ不ズ知ラ何レ処ニ宿セン

解答を見る

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

非キ　　ス

〈例文〉

病容ニ非キ旧日ニ

解答を見る

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよう。

惟タ ツミ

〈例文〉

多病所ハ 須タ 惟タ 薬物モノ

解答を見る

1問 / 1問

押韻している漢字をすべて選ぶ。

解答

相 衆
看 鳥
両 高
不 飛
厭 尽

リセット

只 孤
有 雲
敬 独
亭 去
山 閑

1問 / 1問

押韻している漢字をすべて選ぶ。

解答

朝 何
来 処
入 秋
庭 風
樹 至

リセット

孤 蕭
客 蕭
最 送
先 雁
聞 群

1問 / 1問

押韻している漢字をすべて選ぶ。

解答

遥 独
知 在
兄 異
弟 鄉
登 為
高 異
処 客

リセット

遍 每
挿 逢
茱 佳
萸 節
少 倍
一 思
人 親

1問 / 1問

押韻している漢字をすべて選ぼう。

解答

今 走ラセテ 馬マ 西 来 欲ス 到いた 天ニ
 夜ハ 不ズ 知ラ 何いづレノ 処ところ 宿セン
 平へい 辞シテ 家ヤ 見ル 月ノ 両 回 煙 円まじか
 沙さ 万 里 絶たふ 人 煙

リセット

1問 / 1問

押韻している漢字をすべて選ぼう。

解答

早 病 万 感シテ 時ニ 思ハ 弟 妹
 晚 容 里 非あらず 旧 日ニ
 重ネテ 飲 会セン
 羈き 歸 孤 不ズシテ 寐いナラレ 百 憂 生ズ
 離 思 灯 此コト 夜 情

リセット

1問 / 1問

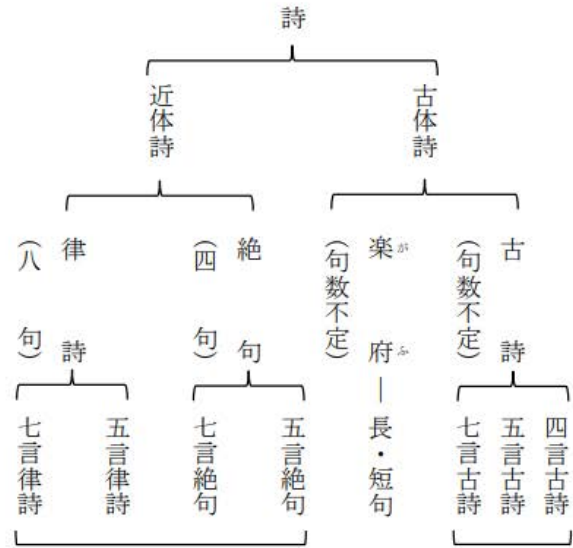
解答

微び 多 稚 老 相 自おの 長 清
 軀く 病 子ハ 妻ハ 親シメ 去リ 夏 江 一
 此コト 所ハ 敲たた 画ゑが 相 自おの 来タル 江 一 曲
 外ニ 須ス 針ヲ 紙ニ 近シク 水 堂 事 村 抱キテ
 更ニ 惟ただ 作ル 為ツクリ 中 上 事 村 流
 何ヲカ 葉 釣てう 碁き 鷗かもめ 燕つばめ 幽しづかなリ

リセット

漢詩のきまり

1 漢詩の形式
漢詩にはさまざまな形式や規則、構成上のきまりがある。



唐代に成立
平仄と押韻の規則が厳格
対句など、構成にきまりがある

六朝時代以前に成立
平仄と押韻の規則は緩やか

絶句と律詩の形式

◎は押韻する字。

□は対句。

五言絶句 5字×4句＝20字
起句(第一句) ○○○○
承句(第二句) ○○○○◎
転句(第三句) ○○○○
結句(第四句) ○○○○◎

七言絶句 7字×4句＝28字
起句(第一句) ○○○○○○
承句(第二句) ○○○○○○◎
転句(第三句) ○○○○○○
結句(第四句) ○○○○○○◎

五言律詩 5字×8句＝40字
首聯(第一・二句) ○○○○
領聯(第三・四句) ○○○○
頸聯(第五・六句) ○○○○
尾聯(第七・八句) ○○○○◎

七言律詩 7字×8句＝56字
首聯(第一・二句) ○○○○○○
領聯(第三・四句) ○○○○○○
頸聯(第五・六句) ○○○○○○
尾聯(第七・八句) ○○○○○○◎

2 漢詩の規則

▼押韻

押韻とは、句末の漢字音（当時の中国音）を合わせることで、詩を朗詠するときの響きを美しくする方法のことである。押韻された字を**韻字**と呼ぶ。どれが韻字であるかを確認する際は、現代日本語の音読みが目安となる。

古詩	律詩
偶数句末（一韻到底〓最後まで同一の韻／換韻〓途中で韻が変わる）	五言〓偶数句末 七言〓第一句末と偶数句末
・五言で第一句末も押韻する破格体もある ・換韻はしない	

例【規則どおりの場合】

王翰「涼州詞」

葡萄美酒夜光杯〓
欲飲琵琶馬上催〓
醉臥沙場君莫笑〓
古來征戰幾人回〓

例【規則から外れた破格体の場合】

孟浩然「春曉」

春眠不覺曉〓
處處聞啼鳥〓
夜來風雨聲〓
花落知多少〓

第一句末と偶数句末が押韻。

韻字は「杯」「催」「回」で

同じ響き。

五言絶句だが第一句も押韻。

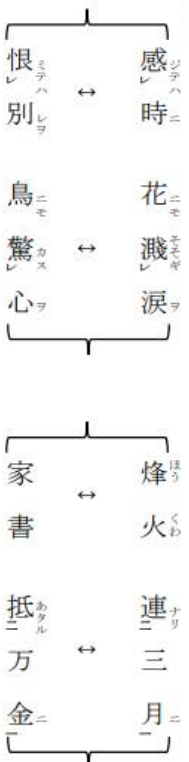
韻字は「曉」「鳥」「少」

で同じ響き。

▼対句

対句とは、品詞・文構造・意味内容が何らかの対応関係を持っている二つの句のことである。原則として同じ返り点をつけることができ、対称性を利用した読解も可能である。

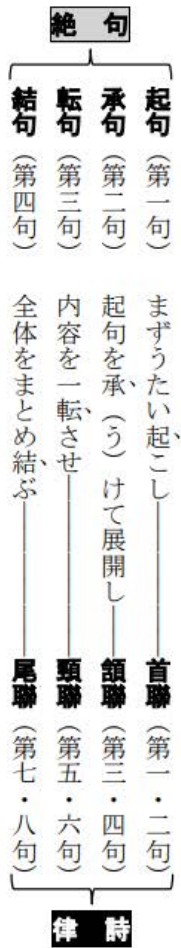
例 杜甫「春望」（五言律詩の頷聯と頸聯）



◆とくに律詩（五言・七言ともに）では、頷聯と頸聯をそれぞれ対句にする原則がある。

▼起承転結

起承転結とは、絶句における構成の作法のことである。律詩においては、二句ごとのまとまりである首聯・頷聯・頸聯・尾聯が、これに相当する。



3 漢詩の構成と読解

▼一首の構成(律詩・古詩)

律詩は二句ごと(＝聯)、古詩は二句または四句ごとをひとまとまりにして解釈する。

例 李白「送友人」(五言律詩)

青山横北郭

青い山なみが町の北に横たわり、白く光る水が町の東を回って流れる

白水遶东城

此地一为别

この地でいったん別れを告げれば、孤独な蓬は万里の果てまで旅する

孤蓬万里征

浮雲遊子意

定めなく漂う雲は旅行く君の心、沈む夕日は見送る私の心

落日故人情

揮手自兹去

手を振ってここから去れば、馬も寂しげに鳴くことだよ

萧萧班马鸣

▼一句の構成

原則、五言は「○○／○○○」、七言は「○○／○○／○○」の区切りで解釈する。

例 柳宗元「江雪」(五言絶句の起句)

千山鳥飛絶

多くの山から、鳥の飛ぶ姿が消えて

例 杜牧「江南春」(七言絶句の承句)

水村山郭酒旗風

水辺の村、山辺の集落、酒屋の旗が風に吹かれる

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何 為^レ 〽^{（モ）}ンヤ

〈例文〉

何 為^レ 寸 步^モ 出^テ 門^ヲ 行^カンヤ

解答を見る

1問 / 1問

次の句形の読みと意味を答えよう。

莫^{カレ} 〽^{（スレ）}ト

〈例文〉

莫^{カレ} 後^ル 晚 花^ノ 残^{モコトハ}

解答を見る

1問 / 1問

押韻している漢字をすべて選ぶ。

閑しづかニ 雪ハ
 収メテ 擁シテ
 乱 山
 帙ちつヲ 堂ヲ
 思フ 樹
 疑 影
 義ヲ 深ク

解答

一 檐えん
 穂ノ 鈴れい
 青 不ズ
 灯 動カ
 万 夜
 古ノ 沈
 心 沈

リセット

1問 / 1問

押韻している漢字をすべて選ぶ。

閑しづかニ 雪ハ
 収メテ 擁シテ
 乱 山
 帙ちつヲ 堂ヲ
 思フ 樹
 疑 影
 義ヲ 深ク

解答

一 檐えん
 穂ノ 鈴れい
 青 不ズ
 灯 動カ
 万 夜
 古ノ 沈
 心 沈

リセット

1問 / 1問

押韻している漢字をすべて選ぶ。

清 僻へき 空 去ゆけヨ
 明 地 中ニ 矣
 期ス 交 懸カリ 三
 再 遊 大 千
 会ヲ 少まれニ 岳 里

解答

莫なカレ 狡かう 海 送レバ
 後ルル 児 末ニ 君ヲ
 晚 教 起コル 生ズ
 花ノ 化 長 暮
 残そこナハ
ルルニ 難かんカラン 瀾らん 寒

リセット

1問 / 4問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何 (カ) (スル)

〈例文〉
婦人何能

解答を見る

1問 / 7問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何所 (レ) (ニ)

〈例文〉
欲至何所

解答を見る

1問 / 7問

次の句形の読みと意味を答えよう。

止 (ダ) (フミ)

〈例文〉
止有
一男
寵恣
過常

解答を見る

1問 / 8問

次の句形の読みと意味を答えよう。

不 (レ) (キ) (キ)

否 (キ)

〈例文〉
君飲嘗不醉否

解答を見る

1問 / 3問

次の句形の読みと意味を答えよう。

不_レ如_カ _ニ

〈例文〉

不_レ如_カ学_{フニ}也_{ナリ}

解答を見る

1問 / 9問

次の句形の読みと意味を答えよう。

〈例文〉

亦_モ将_{マシニ}有_{ラント}以_{モツテ}利_{スル}吾_{コト}国_{ワガ}乎_カ

解答を見る

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよう。

何_ソ _ニ

〈例文〉

何_ソ苦_{シク}沾_ス衣_ヲ如_シ此_{カク}

解答を見る

1問 / 4問

次の句形の読みと意味を答えよう。

〈例文〉

若_シ与_{フレ}我_ニ者_ニ皆_ニ喪_{ウシナフ}宝_ヲ也_{ナリ}

解答を見る

1問 / 6問

次の句形の読みと意味を答えよう。

使_ム A _{マシテ} B _セ

〈例文〉

燕_{えん} 君 使_ム 人 _{マシテ} 受_ケ 之_{これヲ}

解答を見る

螳螂の故事

○『莊子』 山本編

【書き下し文】

莊周 1 雕陵の樊に遊ぶ。一異鵠の南方より来たる者を睹る。翼の広さ七尺、目の大なること運寸、周の類に感れて、栗林に集まる。莊周曰はく、「此れ何の鳥ぞや。翼殷いなるも逝かず、目大なるも睹ず。」と。裳を蹇げて躩歩し、弾を執りて之を留ふ。一蟬の方に美蔭を得て其の身を忘るるを睹る。2 螳螂翳を執りて之を搏たんとし、得を見て其の形を忘る。異鵠従ひて之を利とし、利を見て其の真を忘る。莊周恍然として曰はく、「噫、物は固より相累し、二類は相召ぶなり。」と。弾を捐てて反走す。虞人逐ひて之を諍む。

莊周反り入り、三月庭からず。3 藺且従ひて之に問ふ、「夫子何為れぞ頃間甚だ庭からざるか。」と。莊周曰はく、「吾形を守りて身を忘れ、濁水に觀て清淵に迷へり。且つ吾語を夫子に聞くに曰はく、4 『其の俗に入りては、其の俗に従ふ。』と。今吾雕陵に遊びて吾が身を忘る。異鵠 吾が類に感れ、栗林に遊びて真を忘れ、栗林の虞人吾を以つて戮むることを為す。吾庭からざる所以なり。」と。

【口語訳】

莊周が雕陵といわれる園林の中を散策していた。一羽の奇妙なカササギが南から飛んでくるのを見た。翼の広さは七尺（約一六〇センチ）、目の大きさは直径一寸（二・二五センチ）で、莊周の額をかすめて、栗林の中に舞い降りた。莊周は言った、「これは何という鳥だろうか。翼は大きいと遠くに飛ばず、目は大きいのに見えていない。」

と。服の裾をからげて早足で近づき、はじき弓を手にとって「これを射とめよう」と様子うかがった。ふと見ると、一匹のセミがちょうど格好な木陰を得て我が身の存在を忘れていた。カマキリが斧を振りあげてセミに打ちかかろうとし、獲物を見て我が身のことを忘れていた。奇妙なカササギが後ろからカマキリを獲物として狙い、利益に目くらんで本当の自分を見失っている。莊周はぞつとして言った、「ああ、万物は本来危害を加え合い、利益と損害が互いに引き合うものなのだ。」と。「莊周は」はじき弓を捨てて引き返そうとした。栗林の番人が「栗泥棒と間違えて」追いかけてきて彼を厳しくがめた。



莊周は家に帰ってから、三か月ふさぎ込んでいた。藺且がやって来て尋ねた、「先生はどうしてこの頃ひどくふさぎ込んでおられるのですか。」と。莊周は言った、「わたしは見える形にとらわれて我が身のことを忘れ、濁った水に目を奪われて清らかな世界を見失っていた。それにわたしは先生のこんな言葉を聞いている、『俗に入りては、俗に従え。』と。この度わたしは、睢陵の園林を散策しながら自分を見失ってしまった。奇妙なカササギがわたしの額をかすめ、『わたしは』栗林をぶらぶらして自分自身の本当のあり方を忘れ、栗林の番人に〔栗泥棒と間違われて〕辱められた。私がふさぎ込んでいるのはこのためなのだ。」と。

1 睢陵の樊 「睢陵」は丘陵の名。「樊」は「藩」と同義で、囲いの中の意。立ち入りを禁じられた諸侯の園林と思われる。

2 螳螂 「螳螂」に同じ。

3 藺且 生没年未詳。莊周の弟子。

4 其の俗に入りては、其の俗に従ふ ここでは、俗世間の決まりに従うべきこと、つまり、立ち入り禁止の園林には踏み入ってはいけないことを言う。

1問 / 7問

次の句形の読みと意味を答えよう。

非_ニ与_ヤ

〈例文〉

子_ト非_ニ三_ニ閻_ト大_ト夫_ニ与_ヤ

解答を見る

1問 / 4問

次の句形の読みと意味を答えよう。

幾_ニ何_ト

〈例文〉

而_{シカシテ}浮_ハ生_ハ若_ニ夢_ト為_ニ歎_ト幾_ニ何_ト

解答を見る

1問 / 1問

解答

天 通 雍^{よう} 阿 阿^あ 雖^{いへ} 白
 運 子^ハ 端^ハ 宣^ハ 舒^{じよ} 有^リ 髮^ハ
 苟^い 垂^な 年 行^{ゆく} 已^す 五 被^{おほ}
 如^{ごと} 九^ク 十 志 二 男 兩^ニ
 此^か 齡^ニ 三 学 八 兒 鬢^{びん}

リセット

且^し 但^た 不^レ 而^{しか} 懶^{らん} 総^{すべ} 肌^き
 進^{しん} 覓^も 識^し 不^レ 情^だ 不^レ 膚^く
 杯^{はい} 梨^り 六^{ろく} 愛^{あい} 故^こ 好^{こう} 不^レ 復^{ふく}
 中^{ちゆう} 与^よ 与^よ 文^{ぶん} 無^む 紙^し 復^{ふく} 実^{じつ}
 物^{ぶつ} 栗^{りつ} 七^{しち} 術^{じゆつ} 匹^{ひつ} 筆^{びつ} 実^{じつ}

1問 / 6問

解答

老 暮^レ 翁 投^ズ 踰^{コエ} 牆^{かき} 走^リ
 老 婦 出^デ 門^カ 看^ミ
 暮^レ 投^ズ 石^{せき} 壕^{がう} 村^ニ
 有^リ 吏^リ 夜^ヤ 捉^ツ 人^ニ
 有^リ 吏^リ 夜^ヤ 捉^ツ 人^ニ

リセット

押韻している漢字をすべて選ぶ。

1問 / 31問

解答

廻^レ 天 楊 漢 皇 重^レ 色^ヲ 思^フ 傾^ニ 国^ヲ
 眸^{ひと} 生^ノ 家^ニ 有^リ 女^{むすめ} 初^{メテ} 長^ニ 成^ス
 一 麗 質^ハ 難^ク 自^{おの} 棄^{ツカ}
 笑^{スレバ} 百 媚^び 生^ジ
 六^{りく} 宮^ノ 粉 黛^{たい} 無^シ 顔^ニ 色^ヲ
 一 朝 選^バ 在^リ 君^ニ 王^ノ 側^{かたは}
 養^ハ 在^リ 深^ニ 閨^{けい} 人^ニ 未^{いま} 識^し
 御^{ぎよ} 宇^う 多 年 求^ム 不^レ 得^ズ

リセット

押韻している漢字をすべて選ぶ。

源氏物語

紫式部

桐壺巻・口語訳（抄）

どの（帝の）御代であったか、女御や更衣が大勢お仕えしていらっしやった中に、それほど高貴な身分ではない方で、きわだって帝のご寵愛を受けていらっしやる方がいた。（桐壺の更衣である。）（宮仕えの）最初から自分こそは（帝の寵愛を得よう）と自負していらっしやった（女御の）方々は、（この方を）目に余るものと、蔑んだり、妬んだりなさる。（この方と）同じ身分、それより身分の低い更衣たちは、（女御の方々よりも）いっそう心穏やかでない。朝夕の宮仕えにつけても、ひどく他の女性たちの心を騒がせるばかりで、恨みを受けることが積もったのだろうか、ひどく病気がちになってゆき、何となく心細そうに実家に下がることが多いのを、（帝は）いよいよたまらなほどいとしく不憚なものにお思になって、人々の非難をまはばかることがおできにならず、世の語りぐさにもなってしまういそうなご待遇ぶりである。上達部や殿上人なども、困ったことだと目をそらしそらしして、まことに見てはられないほどの更衣のご寵愛の受けようである。中国でも、このような原因によって、世の中も乱れ、悪いことになったものだど、だんだん世間一般でも、苦々しく、人々のもの悩みの種になって、楊貴妃の先例までも引き合いに出してしまいそうになっていくので、（更衣は）とてもいたたまれないことが多いけれど、恐れ多い帝のご寵愛が比類ないのを頼りとして、宮仕えをしていらっしやる。

父の大納言は亡くなって、母である（大納言の）北の方が、古い家柄の出の人で、教養ある人であって、両親がうちそろい、現在世間の評判が華々しい御方々にもさほど劣らず、（宮中の）何事の儀式の折にもとりはからっていらっしやったけれども、これといったしつかりした後見人がいないので、特別なことのあるときは、やはり頼るところもなく、心細い様子である。

前世においても、ご宿縁が深かったのだろうか、世にまたとなく清らかで美しい玉のような皇子（のちの光源氏）までもお生まれになった。（帝は）早く（見たい）と待ち遠しくお思になって、（その若君を）急ぎ参内させて御覧になると、めったにない幼子のお顔立ちである。第一皇子は、右大臣の（姫君である）女御の御腹（より生まれた皇子）であって、後見がしっかりし、疑いない皇太子（になられるお方）として、世間でも大切にお世話申し上げているが、この（第二皇子の）照り映えるお美しさにはお並びになりようもなかったので、（帝は第一皇子に対しては）並ひととおりの大切になさる御思いであって、この君を、かわいい秘蔵っ子とお思になり大切にお世話なさることとはこのうえない。





もともと（更衣は）並みの女官のような天皇のそば勤めをなさるはずの身分ではなかった。世間での評価もたいへん高く、身分の高い人らしく見えたが、（帝が）無理におそばにつき添わせなさるあまりに、しかるべき管弦のお遊びの折々や、どのような事でも由緒ある行事の折々には、まっ先に参上させなさる、またあるときにはお寝過ごしになって、そのまま（翌日も）おそばにお任せさせなさるなど、無理やりにおそばから下からせないよう待遇なさっていたうちに、自然と身分の軽い人にも見えたのだけれど、この皇子がお生まれになってからは、たいそう格別に待遇しようとお心づもりなさっていたので、東宮（皇太子）にも、悪くすると、この皇子がおつきになるはずのように見えると、一の皇子の（母である弘徽殿の）女御はお疑いになっていた。（この女御は）ほかの方より先に入内なさって、（帝の）大切にお思いになるお気持ちは並々でなく、皇女たちなどもいらっしやるので、この御方のお諫めだけを、やはり氣遣いなさり、氣の毒なこととお思い申し上げていらっしやった。

（更衣は帝の）恐れ多いご庇護を頼り申し上げるのだけれど、（一方では）蔑み、欠点をお探しになる人は多く、自分の身はか弱くはかない様子であって、かえって（ご寵愛がなかったらよかったのという）思い悩みをなさる。（その更衣の）お部屋は桐壺である。

多くの女御・更衣の方々（の部屋の前）を素通りなさって、（桐壺の更衣の部屋への）ひっきりなしの帝のお通りによって、そうした方々が気が気でなくていらっしやるのも、いかにも当然のことと思われた。（更衣が帝のもとへ）参上なさる際も、あまりたび重なるときには、打橋や渡殿のあちらこちらの通り道に、けしからぬことをしては、（更衣の）お送りお迎えの女房たちの衣服の裾が（汚れて）、耐えられないほど不都合なこともある。またあるときには、どうしても通らなければならぬ馬道の（両端の）戸を閉めて（更衣を）閉じこめ、（戸の）こちら側とあちら側で示し合わせて、進むも退くもできないようにして困らせなさるときも多いのである。何かにつけて、数えきれないほどつらいことばかりが増えるので、（更衣が）とてもひどく思いつめているのを、（帝は）いっそう不憫なものとお覧になって、後涼殿にもとお仕えなさる更衣の部屋をほかにお移しになって、（その部屋を桐壺の更衣に）上局としてお与えになる。ほかに移された更衣の恨みは、まして晴らしようがない。

その年の夏、御息所「桐壺の更衣」は、ふとした病気にかかって、（養生のために）実家にご退出なさろうとするが、（帝は）お暇を全くお許しにならない。ここ数年来、病気がちがいつものことになっていらっしやったので、（帝はそうした更衣の様子を見慣れなさっていて、「このままもうしばらく様子を見よ。」とばかり仰せになるうちに、日に日に病状が重くおなりになって、ほんの五、六日の間に、ひどく衰弱するの、（更衣の）母君が涙ながらに帝にお願い申し上げて、実家に下がらせ申し上げなさる。このようなときにも、（宮中を死で穢すような、）あってはならない不面目な事態となつてはたいへんだと、氣配りをして、若君は（宮中に）お残り申し上げて、人目につかないように退出なさる。

(宮中では死の穢れを忌む) きまりがあるので、(帝は) そうむやみにお引



留めになることもできず、(帝というご身分柄、) お見送りすることさえもままならぬ
い心もとなさを、言いようもなく(悲しく) 思われなさる。実につやつやとして美し
く、いかにもかわいらしい人が、(今は) すっかり面やつれして、まことにしみじみと
悲しみにうち沈みながら、(それを) 言葉に出して申し上げることもできず、生きてい
るのかいないのかわからないほどで絶え入りそうになっていらつしやるのを御覧になる
と、(帝は) 後先のご分別もおなくしになり、あらん限りのことを、涙ながらにお約束
あそばすのだが、(更衣は) お返事を申し上げることもおできにならず、まなざしなど
もひどくだるそうな様子で、(ふだんよりも) いっそうなよなよとして、自他の区別も
つかないほど正気を失ったありさまで横になっているので、(帝は) どうしたらよいか
と途方にくれなさる。(更衣の退出にあたって、特別に) 輦車てんぐるまをお許しになる宣旨など
を仰せになってからも、また(更衣の部屋に) お入りになって、どうしても手放すこと
がおできにならない。「(人それぞれ決められている) 死出の道にも、死に遅れたり先立
つたりはするまいとお約束なさったのに。いくらなんでも(私を) 置いては行けません
い。」と仰せになるのを、更衣も(帝のお気持ちを) 本当においたわしいことと拝見し
て、

(帝は) お胸がいっぱいにふさがるばかりで、全くうとうとすることもできず、夜を
明かしかねておいでになる。(お見舞いの) お使者が行き来する時間もたたないのに、
それでも気がかりなお気持ちをしきりにお漏らしになっておられたが、「夜中を過ぎる
ころに、息をお引き取りになった。」と言って(更衣の家の者たちが) 泣き騒ぐので、
お使いの者も、すっかり気落ちして宮中に帰参した。(この知らせを) お聞きあそばす
(帝の) 動転するお気持ち、何のご分別もつかないご様子で、部屋に閉じこもっておい
でになる。

(帝は、) 若君を、このような状況でも(おそばに置いて) 御覧になっていたとお
思いあそばすけれども、こうした母君の喪中に宮中に伺候なさるといのは、前例のな
いことなので、ご退出ということになる。(若君は、) 何事が起きたのだろうかともお
思いになっておらず、おそばの人々が取り乱して泣き、帝もお涙をとめどなく流してい
らつしやるのを、不思議そうにながめていらつしやるばかり。普通の場合でさえ、この
ような(母との) 死別が悲しくないということはないのに、なおさら身にしみて哀れで
何とも言いようがない。

あっけなく日数が過ぎて、(更衣の) 七日七日の法事などにも、(帝は) 懇ろにご弔
問あそばされる。時がたつにつれて、どうしようもなく悲しくお感じになられるので、
女御、更衣たちの夜のご伺候なども全くなさろうともせず、ただ涙にひたって夜を明か
し日を暮していらつしやるから、(そのご悲嘆ぶりを) 拝見する人までもが、涙の露に
しめる秋である。「亡くなった後まで、胸の晴れそうもないご寵愛だこと。」と、弘徽

殿の女御などは、相変らず容赦なしにおっしゃるのであった。(帝は、)一の皇子を



覽になるにつけても、(今は更衣の実家に住んでいる)若君への恋しさばかりが思い起こされては、気心の知れた女房や御乳母などを、たびたび(更衣の実家に)お遣わしになり、若君の様子をお尋ねになる。

野分めいた風が吹いて、急に肌寒さを感じさせる夕暮れのころ、(帝は)常にもましとお思い出しあそばすことが多くて、おんがいの命婦みづぶという女房を(更衣の実家に)お遣わしになる。

夕方の月が美しい時刻に(命婦を)お送り出しなさせて、(ご自身は)そのままぼんやりとももの思いにふけておいでになる。このような夕べには、(更衣の生前は、よく)管弦の遊びなどをお催しになったものだが、格別上手に琴の音をかき鳴らし、ふと帝のお耳に入れる言葉も、ほかの人とは違っていた(今は亡き更衣の)様子や顔つきが、幻となってひたと身に寄り添っているかのようにお感じになるにつけても、(はっきりした夢の中で会うのと、それほど変わらないものだど歌にある)「闇の現うつ(暗闇の中で現実)に会うこと」にもやはり及ばないのだった。(それほど、はかないものであったよ。)

命婦が、更衣の邸やしきに到着し、(車を)門内に引き入れるなり、(邸内の)様子に哀趣を感じる。(更衣の母君は、夫に先立たれて)独り住まいであるけれども、娘の更衣一人を大事に育て上げなされるために、あれこれと手入れして見苦しくないように過ごしておられた、それが、亡き娘を思う悲しみにかきくられて泣きな臥ふしていらっしやるうちに、草も高く生い茂り、野分にいつそう荒れた感じになって、月の光だけが、生い茂る雑草にもさえぎられずさしこんでいる。

(命婦を)南に面した部屋に招じ入れて、母君もすぐには何もおっしゃられない。「今まで生き長らえておりますのがまことにつらくございますのに、このような(帝からの恐れ多い)お使者が草深い家の草の露を分けてお訪ねくださるにつけても、まことにお恥ずかしいことだ」と言って、いかにもこらえきれぬかのようにお泣きになる。

(命婦は)「お訪ねしてみますと、いつそうおいたわしくて、魂も消え失せるようで。』なまじのついでと典侍が帝に申し上げておられました(この私わたくしとき)ものわきまえのわきまえとせぬ者の心持ちにも、(典侍から)聞いていた通りたえがたくたございます。』と行って、少し気持ちを落ち着けてから、帝のお言葉をお伝え申しあげる。

『(更衣が亡くなって)しばらくはこれは夢ではないのかとばかり途方にくれるほかなかったが、だんだんと気持ちが静まってくるにつけて、(かえって、夢ではないのだから)覚めようはずもなくこらえきれないこの悲しさは、どうしたらよいものかと相談できる人さえ(宮中には)いないのだから、(あなたが)内々で宮中に参ってくれないものか。若君が、ひどく気がかりなありさまで、涙がちの更衣の邸で暮らしておいでになるのもいたわしく思われるから、早く参内なされよ。』などと、(帝は)はっきりと最後まで仰せにもなれず、何度も涙におむせかえりになっては、それでも一方では、みなも私を拝してお気弱なことだと思っただろうかと、気がねなさらないで様子

おいたわしくて、（お言葉を）終わりまで承りきらないようなありさまで退出して参りました。」と言って、（帝の）お手紙を差し上げる。



「（悲しみゆえに）目も見えませんが、このように恐れ多いお言葉を光といたしまして。」と言って、（母君は）御覧になる。（帝からのお手紙には、）

時が経てば、少しは気の紛れることもあろうかと、（そのことを）心待ちに過ごしている月日（が流れる）につれて、まことに悲しみにたえがたいのは（私にはもう）どうしようもないことです。幼い若君をどうしているかといつも案じながら、あなたと一緒に養育できないのが気がかりなのです。今は、やはり（この私を）、亡き人の形見と違って宮中に参られよ。

若君はお休みになってしまわれていた。「（若君に）お目見え申し上げて、詳しく（その）ご様子を奏上いたしますが、（帝も）お待ちになっていらっしやることでしょうし、（お目見えしている）きっと夜も更けてしまうことでしょう。」と言って（命婦は宮中への帰りを）急ぐ。

「（子を思うゆえの）悲しみに迷う親心の闇もこらえられそうになく、その一端だけでも、晴らすことができますくらいにお話し申し上げたいがございますので、（公のお使者としてでなく）私的にもごゆるりとおいでなさってください。この数年来、（更衣の叙位のような）うれしく晴れがましい機会にお立ち寄りいただきましたのに、こうした（悲しい）お言づてのお使者としてお目にかからせていただきますとは、本当に無情な巡り合わせでございます。（亡き娘は、）生まれたときから（私どもが）望みを託していた子でして、（父親の）故大納言が臨終の際まで、ただ、『この子の宮仕えの宿願を、必ず成就させてさしあげよ。私が亡くなったからといって、不本意に志を捨ててはならない。』と、何度も言い含められておりましたので、しっかりとした後見をする人もない宮仕えは、かえってしない方がよいことと存じてはおりますものの、ただあの（亡くなった夫の）遺言に背くまいというだけのことで宮仕えに出させていましたが、身に余るまでの（帝の）ご寵愛が、何かにつけてもつたいなくございましたので、（娘は）人並みにも扱われない恥を隠しながら、お付き合いをしなさっていたようですが、人の妬みが深く積もって、気の休まらないことがますます多くなってきましたところ、（天寿を全うしたのではない）自然ではないありさまで、とうとうこのようなことになってしまったのですから、かえって恨めしいことだと、恐れ多い（帝の）ご寵愛をつい（そのように）存じ上げてしまうのでございます。これもまた、（子を思う故に目が曇ってしまった）どうしようもない親心の闇でございますして。」と言いもおおせず、涙にむせかえっておいになるうちに夜も更けた。

「帝も（それは）同じことです。『わが心ながら、世間の人が見て驚くほどに一途に（更衣のことが）いとしく思われていたのも、（思えば、私と更衣の仲が）長くは続かずがなかったからなのだなあと、今となってはつらく思われる因縁だった。（自分としては）ほんのわずかでも他人の気を損ねるようなことは決してしてはいけないと思ってるが、ただこの人〔更衣〕のために、受けなくてもよい人の恨みをたくさん受けたあげくに、このように後に残されて、心を静めるような方法がないのだから、ますますみっともない愚か者となってしまったのにつけても、（私と更衣との）前世の因縁が（どのようなものであったのか）知りたいものだ。』と繰り返し仰せられては、涙にくれてばかりいらっしやいます。」と（命婦は）語って言葉も尽きない。涙ながらに、「夜もすっかり更けてしまいましたので、今夜のうちに（帝に）ご返事を奏上いたしましたように」と急いで帰参する。

（桐壺）

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよう。

莫^シ A ^ハ 於 B ^{ヨリ} (セ)

〈例文〉

天 下 莫^シ 柔^ニ 弱^{ナルハ} 於 水^{ヨリ}

解答を見る

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよう。

使^ム A ^{ヲシテ} (セ) B ^ニ

〈例文〉

楚^ク 王 使^ム 大 夫 二 人 ^{ヲシテ} 往^ル 先^ニ 焉

解答を見る

1問 / 5問

次の句形の読みと意味を答えよう。

誰^カ ()

〈例文〉

誰^カ 加^{フル} 衣^ヲ 者^ゾ

解答を見る

1問 / 3問

次の句形の読みと意味を答えよう。

使^ム A ^{ヲシテ} (セ) B ^ニ

〈例文〉

而^{シカシテ} 使^ム 管 仲 別^ニ 将^ル 兵^ヲ 遮^ラ 莒^ノ 道^ヲ

解答を見る

1問 / 2問

次の句形の読みと意味を答えよう。

豈_ニス_ル哉_ヤ

〈例文〉

荆_{ケイ}卿_{ケイ}豈_ニ有_リ意_シ哉_ヤ

解答を見る

1問 / 5問

次の句形の読みと意味を答えよう。

不_ニ敢_{ヘテ}ス_ル

〈例文〉

不_ニ敢_{ヘテ}拳_{ケン}兵_{ヘイ}以_{リテ}逆_ニ軍_{クニ}吏_ニ

解答を見る

参考動画：きりぎりす（こおろぎ）の声



動画：NHK/Getty Images

参考動画：まつむし（すすむし）の声



動画：栗林慧/JAPAN4K/アフロ

参考動画：ひぐらしの声



動画：NHK/Getty Images

参考動画：笙（合奏：笙・横笛・篳篥）



雅楽同友会/ユニフォトプレス

参考動画：三の鼓（合奏：三の鼓・横笛・篳篥）



雅楽同友会/ユニフォトプレス

参考動画：笏拍子（合奏）



雅楽同友会/ユニフォトプレス

参考動画：琵琶（合奏：琵琶・箏・篳篥）



雅楽同友会/ユニフォトプレス